

■原宿にて徒然に(その3:交友)■



1991年3月31日

俊子さまへ

長らくご無沙汰しております、御免なさいね。毎年あなたからお年賀状いただいておりますが、お返事も出さず、何とも不躰けなことだと思っておりましたのに、又々今年も正月休暇明け頃から生憎と風邪をグズグズと長引かせたこともあって、気になりながらご返信がこんなに遅くなりました。

実は今、「春の休暇」で1週間程実家で骨休みして戻って来たところなのです。あなたが乳癌の手術を受けられたこと伺って、気になっておりましたが、本当に大変でしたわね。そう言えば、去年頃のお年賀状には疲れやすくなったとおっしゃてましたものね。その後、体調を取り戻しつつありますか。案じております。事実として心細く辛いことであつたに違いないでしょうが、あなたのおっしゃる通り、自分の人生をこころ辺で前半・後半と見渡す良い機会にはなつたことでしょうね。

もうお子様方は皆立派に巣立たれましたの？京大(教育学部)の大学院当時、既にあなたは学生結婚されていて、頼もしい伴侶がいらした。確か法科の学生運動の闘士でしたわね。やがて子供たちも。家族がいればこそ経験出来た様々なことがあなたにはあるのですものね。一緒にそれだけの時間を生きられたということは、本当に尊いことに思えてなりません。私には今更自分の両親やら姉妹以上の家族は持てませんけれども、これ迄もそう

であつたように、その時々に関心と一緒に生きてくれる仕事上でお付き合いを大事にし、それらの人々を自分の内なる‘ファミリー’とすることでしょう。それで十分に報われてもおりますし。

ところで、両親が姉夫婦の住む琵琶湖畔を終の棲家に決めまして、舞鶴から2年程前に引っ越しましたの。今は滋賀県の膳所という大津市のお隣に住んでおります。私は、年5回の休暇毎にそこで両親と過ごします。イギリス留学時代の親不孝の埋め合わせはとつきの昔に済んだ筈なのですが、依然として出来過ぎた(?)親孝行を続けております。それはそれとして結構幸せなことに思っております。宇治に嫁いだ妹がおり、姉の住まいはすぐ近くですし、全員集合も頻繁ですから、父も母も随分と華やいだ幸福な老後を迎えていることになります。ここに到るまで、私としては並々ならぬ力を尽くしてきた訳でしたから、大いに安堵の胸を撫で下ろしているのです。

最近やっと彼の地ロンドンでの留学時代に遡り、来し方を、その様々な出遭いを振り返って見る余裕がどうにか出てきました。10年余も倉庫に放置したままの臨床資料を引っ張り出したところです。あの当時の自分を、幼稚とか未熟だとか、見るに耐えぬ思いで見ただけではない何かが発見できればいいのですが…。老いてゆく親に接しながら、改めて今度は自分が「親になる」ことを試されているような、そんな経験を味わい、それもまずまず成功的に味わつたことの気持ちの余裕が彼の地での辛かつた時代の記憶に直面する上で、幾らかなりとも強みとなつてくれることを願っています。

心理臨床家としての個人開業は孤独ではありますけれど、経験を咀嚼するのに十分な時間があることが結構気に入っているのです。

でも、後進の指導という点では、期待されている向きがなくもなかったのですが、これまで帰国後殆ど‘隠れた人’のままでしたから、内心これではいけないかしらと反省したりすることもあったのです。が、つい先日姉に付き合っ、東京で開催された『日本心理臨床学会』に出掛けまして、最近の学会の動向を知るにつけ、いっそう改めて自分の出番はなさそうだとの感触を深めて帰ったような次第でして、これからのことは尚不透明な状況です。

要するに、他人のお世話というよりもむしろ本音のところでは私は何よりも誰よりも「自分が生きること」に興味があるらしいのです。それを徹底してみた先に果たして何が待ち構えているのやら。我ながら心もとないのですが。しかしながら、そんなこんなで随分と‘我がまま人生’貫いていることにもなりますし。それだけのツケ・代償を支払う必要があるわけです。ひたすら我が行く末を見届けたいというわけですから、まだまだ当分生きるつもりであります。

遠く離れていて音沙汰なしにしても、あなたのことを時折思い起こすことがあります。つまりそれは多分、あなたが、私が生きたくも知れないもう一つ別の人生を生きているという意味での関心からです。どうぞお元気でいらして下さいね。

ご機嫌宜しく かしこ

千鶴子



1994年1月15日

Prof. W.S.先生

寒さ厳しき折り、如何がお過ごしでしょうか。先日先生からお葉書頂戴致しまして、正直のところ私びっくり致しました。それはあまりにも昔のことですから、覚えていただいているかどうか心もとないということだけではなく、たとえそういう人が確かいたという記憶があまりでも、今さら・・・とお思いになられても当然でしょうから。あの折、ロンドンからドーヴァー海峡を隔てた彼の地パリを訪れた際に、カフェ・テラスでたまたまちよっとお喋りしただけでしたのに。それが、覚えてくださっていただけではなくて、帰国後の私の臨床家としての動向にひそかに関心を寄せてくださっていたと伺いまして、あらまあ・・・と、意外な感に打たれました。

私の現況と申しますと、47歳の今現在にして、Dr.(Ph.D.)でもなく、ついでに申しますとMrs. でもなくてMiss. でしかないわけです。そしてその私が、これといっためぼしい学術論文を一篇すらものにするわけでもなし、学会など如何なる組織にも何ら積極的に貢献するでもなし、あれこれの講演依頼などはすべて断ってという具合で、唯々臨床一筋に明け暮れ、そろそろ帰国後の個人開業も14年を経ようとしております。我ながら随分と強心臓だと、内心呆れる思いがなくもありません。(それもまあ正直なところ、打ち明けて申せば‘おっかびっくり’の一語に尽きる日々であったわけでしたのですけれども・・・)

それでどういう目論見があったかと言えば、漠然とながらも、とにかくロンドンで自分が何をどう教えられたかを一度総て忘れる必要があるという風に思ったわけですね。そしてその上で此の地でしかも臨床の場において果して如何なる【精神分析言語 (psycho-analytical language)】(それも当然日本語の!) が培われ育まれるか、まさに己自身を(そして被分析者の皆さんをも巻添えにして) ‘実験台’ にしてみたわけですね。今尚続行中でして、依然として決着が付いたとは言いがたいにしろ、ぼつぼつそれらしきものの兆しは見えてきたという手応えを最近感じ始めております。

そこで溜息混じりにしみじみ感慨を深めますことは、『私の精神分析』は私自身・私そのものなのだということですね。それを今後なお徹底させること、そして同時にそれを能うかぎり超克しなくてはならないといった2つの矛盾した課題に今突き当たっていると申せます。でもそれは急いで決着を付けることでもありませんで、これ迄もそうであったように、これからも成り行き任せになろうかと考えております。

いずれにしても臨床現場で起こることの不可思議さと言いますか妙なものに魅され続けてゆくことでしょうし、そうであることで充分幸せに感じておりますの。関心のポイントと言いますのは、解釈する際のことですが、自分が何をどう考えた云々というより早く(つまり意識がそれをそれとして自覚的に追認する以前に) 言葉が先行して語られ、つまり言葉が言葉を紡いでいってるといった具合ですね、時折思いも掛けない予期せぬ言葉で最後を締め

括って終わるものですから、我ながらびっくりしたりすることがあるのですのね。その瞬間私が ‘私を超えた’ と言えますかどうか、それはともかくも自分が何をどう解っているからそうした言葉が出てくるのか、そろそろそれを技法上詳らかにしなくてはと、近頃は専らフッサール現象学と格闘しております。とてもそう簡単に総括されそうにありませんようで、前途多難を覚えますのね。でもそれはそれで当分生きることに退屈しないですむだろうと内心喜んでおります。事実そのお陰と申しますか、晩稲(おくて)の私がようやく ‘知恵づいた’ ということなのでしょう、専門は無論、専門外のさまざまな方々の教えに接して大いに学ぶところがあり、自分の関心との繋がりが見えるにつれ、いっそう興味深く思われ、ワクワク胸躍らせることが近頃頓に増えてきておりますの。

実は、それら最近私が図書館で物色した限りで眼に止まった書籍と言いますが、特に意図したわけではなくて、ごく自然に私の関心がそちらに向いてきたのですが、なぜかフランスの著述家のものが殆どでして、彼らの論理の緻密性・重層性に圧倒されております。先生のご専門なりご興味がどういったものでしたか、失礼ながら私の記憶が鮮明ではございませんのですが、彼の地でのそうした精神風土(思想的伝統)に親しまれていらっしゃるわけですから、私の方こそ先生が帰国後どのようにご自分を展開されてこられたかを是非ともお聴き致したい。どんなにいい刺激になるかと思われれますの。充分にお話し相手になれますかどうか些か危ぶむ気分もございませぬけれども……。

それでは今日はこれぐらいで・・・どうぞお風邪を召しませぬように。

ご機嫌よろしく。 敬具

山上 千鶴子



1994年2月23日

Prof. W.S.先生

ようやく春めいた気配が嬉しい今日この頃でございますが、ご機嫌よろしくいらっしやいますでしょうか。

先日は、貴重なご玉稿を頂戴致しまして恐縮しております。先生の《我が闘争》とも言うべく一端を垣間見る思いがあり、大変興味深く拝読致しました。

まずは先生のおっしゃる‘カルチャー・ショック’への私側からの共振・共感といった関連で想起されましたことから一つお話致しますと、帰国後ややしばらくしてですが、誠におかしなことに、例の【三猿の像(見ザル・聞カザル・言ワザル)】を眼にする毎に、無性に激しい敵愾心を抱く自分を意識することがありましたの。「見ざる・聞かざる・言わざる」とは、即ち「見せない・聞かせない・言わせない」と当然ながら背中合わせだというふうに理解しておりますけれども、それを目の仇にしなごら、実は内心精神分析家としての私はこの日本のどこにも誰にもまるで‘用のない人’でしかないのでは・・・といった疎外感、そしてちょっぴり悲壮感に悩されておりましたようでして・・・つまり、この場合の敵愾心と疎外感は裏表に繋がって

るわけです。それは、現在においてもまるっきり決着が付いたとも言えませんけれど。ここに辛うじて生き残っているという実績を踏まえれば、自分がたとえ‘用のない人’であるにしろ、以前に比べれば大してめげなくなったというだけのことではかありません。諦観とも違う、現実検討能力がいくらか身に付いてきたといいますか・・・そんなところです。

さて、先生のお薦めのF.ドルトの『子どもが登場するとき』を少しずつ読み掛けておりますが、臨床の枠の外へ出て精神分析家が一般大衆向けに何が語れるか・何を聞かされるかに挑戦したその勇氣には感服致しました。時には過激とも時には突拍子もないと反撥されることでも、そうした言葉が語られる・聞かれる精神的土壌・素地が一応フランスという国にはあるということに羨望を禁じ得ないわけです。私はこれ迄自分の臨床の枠だけでも何を語るか・聞かせるかにおいて、常に‘おっかなびっくり’でしたし、対象を殆ど成人に限っているのもそのせいです。そしていつしか児童臨床から遠ざかっております(個人開業という制約も勿論あるからですけれども・・・)。

帰国後、此の日本の地でいくらか奇異な感じを覚えたのは「三猿の像」だけではありませんでして、或時電車の中で不可解な光景に出くわしたのです。3、4才の男児が何かむずかって泣き声を張り上げているのですが、傍らの母親は黙りこくって突っ立ったまま、無反応と無視を続け、その子はやや混雑した電車内でそのまま下車する迄の20分かそこの

間泣き通してでした。その際の母親の凍り付いたダンマリにはくあんたは悪い子だ！だから私の子じゃない！私は知らない！>というメッセージが十分過ぎるほど伝わってありました。

よく気をつけてみますならば、これに類似した状況は結構至るところで容易に観察されます。<いい子じゃなきゃ、お母さんの子じゃない！>というのが、極めて普通一般の‘躰け’であるらしいことにも気づかされたことです。そのように躰られて大きくなった彼・彼女は、そのツケを臨床の場で支払うことに多くの時間を費やすこととなり、それに私は此地でかれこれ十数年付き合ってきたとも言えましょうか。そこには、自分を自分に対応づける言葉が（従って無論のこと自分を他人に対応づける言葉も）絶望的と言えるほどに不足している・育っていないという印象が拭い難くございます。

ここで極めて個人的なことなのですが、昔の幼少時の自分を振り返って思い出すエピソードが一つありますのね。それは私が4、5才頃でしょうか、2歳半下の妹に激しいヘンネシ（嫉妬）を昂じさせておまして、腹の虫の収まらぬ私は、ある日母親にくどうしてサッチャンばかり可愛いがるの？>って詰ったんでしたのね。そしたら当時私にそうとう手古摺っていたはずの母親が言いますに<サッチャンはあなたよりも遅れて生まれてきたわけだから、お母さんが死ぬ時には、それだけあなたよりもお母さんと一緒にいた時間が少ないわけだからね、サッチャンは可哀相なのよ>ということでしたの。そう告げられて、奇妙なことにその言葉が私の

中に俄然スツと収まっちゃったわけなのです。ああそうかあ、サッチャンは可哀相なんだあ・・・と、至極スナリ納得しちゃったわけです。この母親の変てこな理屈で言えば、私には1歳半年上の姉がおりますから、当然私だって彼女に比べれば可哀相であるわけなのですけれどもね・・・。かくして母親の諭しにまんまと乗せられたというか、妥協（譲歩）した私は、それによってやっとこさ関係を修復したと言いますか、即ちはぐれかけていたお互いを自分の中に再び取り戻すことに辛うじて成功したのだと、私は今にして思うのです。それは言い換えれば、‘自分ではないもの（非自我）’を‘自分なるもの（自我）’の中に見いだす、即ち「合一への回帰」ということになりましょうか。自分と折り合いを付けるということが精神分析の一つの眼目でありますから、これがまさに私の精神分析家としての原点と申せましょう。（蛇足ながら、私の精神分析家としての才能を信じ、熱烈に支持してくれたのもこの母親でして、私は彼女に深い恩義があることになります・・・。）

かくの如くでありますから、私にとって言葉というものは生きることの糧とも確かな指針とも言えるような極めて楽観的なものでして、ラカンの言論（ロゴス）への懐疑を共有する余裕は今の私には幸いにも皆無と申せましょう。私はラカンについては門外漢であります以上、いかなる議論にも参加したいとは思いませんが、ただ一つ彼の晩年の例の評判の極めて悪い臨床スタイル（セッションを短時間でプツンしてしまうといった）、あれはもしかして禅の影響かしらという疑問がかねてありましたが、どうでし

ようかねえ。いずれにしましても、ソフィストの末裔かとも思われるほどに言論を縦横に駆使する巧みさにおいて他の追随を許さないほどの圧倒的な力を奮った彼が、言論嫌い(ミソロゴス)に墮したというのでは、誰しも釈然としないのも道理であります。それ以上に、個人の生の独自の在り方に強調点を置くことを特徴とし、一人びとりが個として暗闇に立ち向かうといった西洋的な精神の目標と理想を擁護すべきところの一個の精神分析家としての倫理が、彼についてここで改めて問われることになりはしないかという気がしております。まだまるっきり始まったとも言えない日本での「精神分析」の行く末を憂うとき、それでは困る・・・というのがまあ率直な感想なわけです。

それはさて置き、ラカンについて特別私の関心を引いた事柄が一つございまして。1966年ポルティモアでの国際シンポジウムでのラカンの英語による口頭発表、【言語と無意識】という題を翻訳(「現代思想総特集＝ラカン」青土社 1981)で読みましたのですが。その中での一番最後のくだりに《sujet de la jouissance よろこびの主体》という観念についての彼の陳述です。ご存知でしたでしょうか？生命体というものが何にもまして《よろこびの主体》であるということと、生物体は過剰なよろこびを避けるようにできているらしいということ、それでもなお主体は、ありとあらゆる欲望によってこの禁じられたよろこびに接近し、それを試みようとしているといった指摘です。これは凄い洞察です！！ああしかし、彼は一体何を見たというのだろう？ 彼が見たであろうものの殺伐

とした凄惨さを想像してみるのです。もしかしてそれは、彼という人間の‘原風景’を彩る何かではなからうか。そうであるからこそ、彼にはそれが見えたとは言えないか。そんな直観めいた当て推量をふと試してみるのです。そこには、私をして踏み込むことを躊躇させる何か、倒錯めいた激越さがあります。事実私にはこれ迄パラノイアもヒステリーも分裂病もじっくり深くお付き合いしたという症例が一つもないのです。でもラカンのそれは、臨床家として私が時折抱くところの、ああ人間というもの、自らが誰で何であるのかを思い出すために日々生きてるといふよりも、むしろそれを忘れんがために日々生きているのか！？といった嘆息にも、もしかして一脈通じる何かであるのかも知れません。自分というものが日々摩滅し消尽してゆく、それに自らが手を貸す、それしか人には選びようがないのではないかといった殺風景かつニヒリスティックなイメージが、ふいと頭を過ぎります。そしてこれは、彼のその後を予兆してはいませんかしら？ それにしても彼の《よろこびの主体》は、一体何故にそしてどこへ掻き消されてしまったのかしら？

さてこちら辺でおしゃべりは終わりと致しましょう。ショパンの《ノクターン》(クラウディオ・アラウのピアノ演奏)を聴きながら、これを綴っておりましたもので、些か情緒っぽくなりましたけれども、どうぞよろしくご判読くださいませ。それでは、どうぞご機嫌宜しく。

山上 千鶴子

.....



1994年11月19日

Mrs. S.T.先生

朝の光がカーテン越しに温もりを届けてくれる中、フォーレのピアノ・ソナタのやわらかな響きが部屋いっぱいに舞います。窓の外からは微かに木枯らしの音が聞こえてくるようですので……。そんな朝の心和むひととき、あなたのお心のギッシリ詰まったお手紙を読みながら、何と贅沢なこと！ 私って、何という欲張りで幸せな女(ひと)なんでしょう！ って、そんな風にふと思えましたのね。こういうのを何冥利に尽きるって表現したらよろしいのかしら？ 本当に嬉しいおたよりでした。どうも有り難う！ そこでお礼に、ここに心に思い浮かんだ事柄を幾つかを綴ってお届け致しますよう。

私は、これ迄「フェミニズム」というテーマにまともに取り組んだことがありません。かつて以前『フェミニスト・セラピー仲間』のメンバーのお一人とご一緒にお仕事をした経験がありますのに……。どうも自分の中でもう一歩踏み込めないというか、彼女らに‘連帯’を覚えることなくしてこれ迄まいりましたの。これは、ある意味では心理臨床家としては迂闊であり、また怠慢の極みでもありましょうが、何故？ と今改めてそれを問うとき、ふとこういうことじゃないかという気がしましたのね。

私には「女性なるもの」についての彼女らの悲観なり感傷なりがまるで欠如しているのです。実際にはむしろその逆なのです。希望が、そして信頼があるのです。メラニー・ク

ラインの血脈、それを最も色濃く受け継いでいるのが Dr.メルツアーなのですが、どうも彼らの精神分析理論には絶対的な「女性優位の世界観」がガッチリ基盤になってはおりますようです。おそらくユダヤ思想、特にカバラが背景にあるのではなかろうかと、私は密かに当たりを付けておまして、これから文献を漁るところでありますの。

(そう言えば日本においても、随分昔我らの先輩に「高群逸枝」という女性史家がおいででしたが。「原始、女性は太陽であった」という言葉は有名ですかしら？「平塚らいちょう」の青踏派もその流れでしたかしら？)

こうした先人の流れを汲むものとして日本のオトコ社会における女性蔑視の気風に過激に反撥するいわれも、またそれに隷従的に加担したり同調するいわれも私には無いと申せましょう。ここらがもしかしたら世間知らずと言われそうなところですけども、何かを変えようとするなら、自分の中の‘女性蔑視(女性であることの劣等意識・いじけ・僻み)’からまずは己自身が解放されていなくてはならないと私は思うのです。私自身がそうでしたから…。まだまだ四苦八苦しておりますけれどもね。

さて、今回あなたから「ニキ・ド・サンフォーレ」を教えられまして、なかなか面白かったです。どうも有り難う。あなたが那須高原の『ニキ美術館』で、彼女の作品を目の前にしながら心の裡に抱かれた‘些かの不協和音’をどうぞお大事になさって、それに充分にこだわってごらんになれるのがよろしいでしょう。

最近私は、ふと或る3つの“S”というものが頭を過ぎりましたの。それは、Sincerity、Sensitivity、Sexualityというものでして、このSincerityというのは、Dr.メルツアーの最近出版されました著書の題名でありますけれど…。性というものの探究は、男女を問わず、昨今極めて難しくなっており、奇妙にも貪欲さと貧困さとが現代において最も露(あらわ)になっている領域なのではありませんかしら？つまりは、「欲しいけど貰えない、あげたいけどあげられない」人がいっぱいということかしらね。そして‘性の充溢’というものを考えますとき、究極的にはそれは、人に対してsincereであり、人としてsensitiveであるということと密接に繋がっていかなくてはならないという気が致します。

以上の観点から、ニキという人はおそらくその途上にあったと言えるかも知れません(ちよびり鼻頂目で見ても)。その生い立ちの‘受難’を考慮に入れるならば、これから申し上げることは苛酷すぎるように聞こえましようけれども、ふと心に過ぎった感慨を綴ってみましよう。彼女のアート・ライフとは、おそらくクライン流の解釈で申せば、“良い父親”の摂り入れに失敗があり、その無念の報復としてむしろ“悪い父親”に加担し、己自身がそれとの同一視というかたちで、良い母親を虚仮(こけ)にし、或は虐(しいた)げるといった筋書が少なくともその端緒となっております。いずれにしましても、私が症例・ハンナとの臨床の中で聞き覚えのあるところの「大嫌い大嫌い！だってわたしのこと愛してくれないじゃないの！（「I hate you, because you don't love me！」）」という叫びが頻りに充満している、そんな世界

ですのね。そんな風に自分の依存対象を汚辱の中に虐げ、そして屈服させることへと執拗に駆り立てられたところの彼女の支配性のもの凄さとともに、自分が何者かであるという並々ならぬ自負の念、それは小さな女の子でしかないハンナの中にもあったのですが、まさに脱帽といった気分を抱きますけれどもね。

しかしながら、ニキが我が子を捨てたのは、おそらくはそうした己自身の凶暴性の怖さを我が子に投影し、つまり自分がしたことはされることですから、自分の犯したと同様の報復を彼らから自ら受けるであろう未来から逃げたのだということではなかったかしら。それが私にはとても惜しかったと思えるのです。つまりね、子どもは親を叩き台にして踏台にして大きくなるものなのです。そして親はそれに耐え抜くことで、親としての、そして人としての値打ちをもまさに発揮できるのですから。もしもそこに尚、希望やら信頼が語れるとしたらですけれども…。ニキの中に、彼女の母親の奇矯さ、偏狭さ、頑迷さがそっくり受け継がれているような気が致します。それを乗り越えるためには、彼女はどうしても娘が（或は息子でもいいのですが）必要だったはず。その娘がもしもニキほどに覇気のある女の子でしたら、彼女は大いに叩かれ、踏んづけられたでしょうに。そうであつたら彼女の人生もそして芸術もまた違った展開になったろうにと些か残念なのですよね。

「すべての生命の母」であるよりも、「二人の子どもの母親」であることの方が格段に面白いはずなのに…。そんな風に、極めて普通の人であります私の常識は、やはりそこ

にちょっと違和感を覚えるのです。それから又、自分の解放とは即ちその母親の解放であり、さらには我が娘の解放でなくてはなりません。つまりそうした過程において、必然的に女性解放なり階級差別などの社会的矛盾へと開かれた眼が必要になるものと期待されるのです。つまり‘連帯’との交わりです。ここで重要なのは、それが決して男性たちの出番を封じるものではなく、むしろ彼らという‘援軍’を必要不可欠としているという点です。そんな風に、私は考えます。確かに上野千鶴子女史のおっしゃるとおり、ニキは自力で自己解放の道を歩んだのでしょう。その後続く我々は、彼女を一つの恩恵とすると同時に、また一つの叩き台として、彼女が乗り越えられなかったものを更に乗り越えんと努力することが期待されているという風に考えますが、如何がでしょうか？ お互いに頑張ってください。

では今日は、この辺で終わりに致しましょう。どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1995年1月10日

Prof. 清 真人さま

お久しぶりです。お正月休暇から戻り、貴方からの思いがけないお届けものを手にし、とても嬉しい驚きでした。有難う！

いよいよ第3作目のご著書『《受難した子供》の眼差しとサルトル』に取り組み始めておいでなのね。頂戴した執筆原稿のコピーを読み始め、貴方の書く文章を改めて好きに

思えました。もちろん貴方の例の『言葉さえ見つけることができれば』(同時代社 1987)も秀逸でしたけれども。

その理由はと言えば、恐らく貴方にはいつも自分に共鳴してくれる(或は反撥でも異議でも、ともかくも反応してくれる)誰かが、実際貴方の身近に、そして貴方がそれを書きながらも念頭に、常にいる(いた)というのではなからうかと思われませんか。貴方の文章からはいつも、呼び掛けと応答とが通い合う人同士の温もりが伝わってきます。それは、貴方がいつも誰彼といった親しき人らによって抱えられてきた(つまり、はぐれなかった)からであり、そしてまた貴方自身もここに常に誰彼といった親しき者らを抱えてこられた(はぐれさせなかった)ということではなからうかと感じられ、私にはそれがまことに貴く思われるのです。……

感想ということになりますかどうか、少し綴ってみたいことがあります。サルトルの「暴力は、つねに修復不可能なもの、取り返しがつかないものの探索である」という言葉は、確かに刺戟的ですよね。それはつまり、関係性の不可逆性(どうにもならない!)への抗い・刃向かいといったことになるのかしら? 関係が可逆的である(どうにでも出来ないはずはない!)、つまり我が手に総ての事態がそして事柄が掌握されてあるといった万能感的衝動への転換が図られている(即ち、サルトルの「破壊は・我有化を実現する」)?! 子どもの積木遊びを連想します。積み上げたものを壊すことの喜び。創造者と破壊者とは紙一重ということかしら?? 貴方が出逢われて、貴方

の心に消しがたい刻印を残したSそしてNという男性たち、彼らについて言えば、それがまさに成功していない、それどころか無残にも打ち砕かれている。そして対象(外的或は内的いずれにおいても)を凍結するか粉碎するかという手段が取って代わられたとも言えましょう。それは、自分の無力感・無能感、つまりは対象からはぐれてる・はぐれさせられているといった焦躁感・挫折感の否認にも起因しているわけです。暴力(破壊性)は、それら否認を助長し、むしろ倒錯的な快感へと転換させるでしょう。それは、やさしさや甘えを排した非情さ(シニズムの温床)となりましょうが、それは往々にして‘男らしさ’と勘違いされる何かではありませんかしら(巷で言うところの“男の美学”)?? 人との絆から敢然と解き放たれんとする、その潔さ、そしてそれは取りも直さず‘人でなし’になることの甘美な誘惑。それが恐らくはかつて貴方が彼らに対して抱いた魅力(共感)であり、また嘔吐(反撥)でもなかったかしら?

これから申し上げることは、貴方に課題としてお考えいただけたらと思うの。彼らとの共感において、私は自分が女であることで、或る制約を覚えるのは事実だけれど、しかし、彼らの深いどこかで必死になって執拗に「良き父親(父性)」が請われている・求められているという感じを抱きますわけ。その良き父性なるものの不毛さが、SについてもNについても、諸悪の根源としてあるというふうに見ます。そして、彼らは彼らなりにそれに恋いこがれながら、しかしどこかでそれに値しない自分を嘆き、だからこそそうした自分に抗いつつ、逆説的に「裁きの

父親(懲罰的な父性)＝刑務所)」との繋がりに収まるべくして収まった(或は嵌めた、嵌まった?)とは言えないかなということ。息子と父親との関係、それは怖い主題です。

最近私は、貴方もご存じでしょうが、フロイトの《エディプス神話》の見直しの必要を感じております。そして「エディプス」とは何か。それは、“罪を犯す自由”の象徴ではなからうかと考えました。エーリッヒ・フロムの受け売りなのですが、ユダヤ思想においては、罪を犯すとは神からはぐれることだということです。そして人は、その神との一致を贖う過程の中でこそ、人間性或は自己意識を獲得してゆくということらしいのです。抗う・刃向かう・離反する自由、それが許されてこそ、初めて人は自分を自分として引き受けられるということでありそうです。しかもそれは、「男性性の確立」という点において、極めて特徴的な何か(必須条件?)ではなからうかというふうに臨床的に見えています。

息子と父親という永遠にして熾烈な対立関係、そこでこそ、父性が或は夫性が生まれ鍛えられるではなからうか。しかし果して希望はあるのか。それが、永遠に問われているという気がするのです。貴方の記憶の中で、彼らSがそしてNがこれまでもそしてこれからも‘腐葉土’としてあるとしたら、彼らが躓いたものが一体何であったのかの問いに、貴方が一生を通して答えることでしょうから、その一つとして、息子と父親という永遠のテーマをぜひ貴方ご自身の生の中で、ここ迄生きて！と言えるまでに生きていただきたいのです。

今日は、この辺で終わりましょう。
いずれ又、近々ご連絡致しましょう。
どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1995年3月21日

阿部 豪一先生

いつも有り難う！アトリエに電話をする度に、お忙しいのに面倒臭がらずに実に丁寧に応答していただき、折々にまるで‘知恵袋’みたいに、何かしら励ましになるようなお話しを淡々とお聞かせてくださるのには、やはり世界各地を裸足で放浪してきたとおっしゃるだけのことはあるなって、ほとほと感心致します。そして、その淀みの無い、爽やかな語り口がとっても羨ましい！心理臨床とはつくづく「話芸」なんだということを貴方に悟らせてもらっている気がします。

さて、【語り塾】の沼田曜一先生は、よく《話の花束》とって、我われ塾生一人ひとりに‘お話’をご所望なさるわけ。これが結構難しいの。ごくごく日常的な普段の生活のなかで‘お話し’のネタって有るようで無い。もしかして無いようで有るのかも…。皆さん、どなたも四苦八苦なんだけど。そのお蔭なのかどうか、こんな話って面白いかしら？って、つい人に話す気になるの。だからか、塾生の皆さん方とっても嬉しい賑やかな‘お喋りやさん’なのですよ。

そんな前置きから、貴方にぜひお話したかった「沼田曜一」についての話に移るの

ですけどね。画家である貴方と俳優である「沼田曜一」とは違うけど、でもワァー、似てるって、時折感じるものですから…。彼が結核に冒され、俳優業を一時断念して、紙芝居一式を車に積んであちらこちらの施設を慰問しながら旅して全国を回ったときの話の中に、こんながありましたの。

確か富山でだったか、台風の時期、そこは常に通過点なもので、従って毎年相当な被害が予想されるわけなの。道の傍らに祠があって、そこに何と煙草盆が置いてあったんですって。それは荒れ狂う暴風に向かって、<ちょっと一服して行けや>という呼び掛けなんですってさ。なんとこのびやかな！もう一つ別の土地では、同じ風避けの意味ではあるんだけど、鎌が1丁軒下にぶら下がっていたって。でもこういうのはむしろ滅多になくて、どちらかと云えば日本人は対立を避け、<まあ一休みしてゆかっしやい>と云った具合に宥めるんだって。そして彼は言うのね、<自分は曖昧な人間だと思ってる。曖昧というのは調和であり、宥めることだって…。>。ここら辺りが至極いい！土着の日本人の特性とはまさにこれなんだろうなって、なるほどなーと共感できた次第なの。

貴方が聞いていたらきっと大喜びするだろうと思ったお話が一つ。雪国でね、寒さに行き倒れた人を肌のぬくもりで甦らせたと言いつたの。そしてこの人間の肌のぬくもり、心のぬくもりを伝えようとしたのが「語り」であつたとも云えると、彼は言うのね。これ、いいわよね！

ところで、とても不思議な感覚を味わったの。沼田曜一が何故今ここに到ったのかのご自分の経歴を語り出し、それに耳を傾けるうちしばらくして不意に或るイメージが私の脳裏に浮かんだの。それは、トランプのカードなんだけど、後ろ向きに並べられていて、それが次々にめくられて、表に返されてゆくわけなの…。ほら、「ババ抜き」とか「神経衰弱」とか数合わせのトランプ・ゲームがあるでしょ？あれだけど…。つまり彼の発する言葉に誘われて、あるいは呼応する恰好で、私の中の同じそれがひとつひとつめくられて表にされるといった感覚なの。それを無理に敢えて解説すれば、「あら、この人、私の言いたいこと言ってくれる…。！」ということなんでしょうが。でも事実はむしろそうじゃなくて、まるで懐に抱かれながら子どもが無心に母親の眼をそして唇をジッと見詰めながら、一つひとつ言葉が出てくる度にそれを吸い込むような具合なのね。無論その言葉が自分の口から出てくるわけないのに、その語られた意味を分かろうとする過程の中で、自分がそれを言ってるのか母親がそれを言ってるのか見境がなくなるような…。まあ極論すれば、赤子が口に母親の乳首を含んでいるときに、口と乳房とが渾然一体となって、どっちが誰のというのが見分けが付かないものとなるといった心理状態に酷似しているような気がするの。ああ、そうなんだ、自分の中で言葉は眠っていて、それが誰かによって語りかけられることによって、初めて目覚めさせられてゆくんだなあって、俄然得心が行ったわけ。

そして、私の心理臨床の狙いとは、要するにこの一点に収斂されるんだということなの。

近頃ラジオの電話相談を聞きながらつくづく思うの。親子が語り合う言葉を持たない、つまり大人も自分を語る言葉を持たない、そして子どもも自分を語る言葉を持ってないでいる。そうした言葉の貧困さがこの国に蔓延しているという憂いべき実態を…。ああ、「語らねばならない、聞かれねばならない」…って、俄然見えざる敵が見えてきた！「見ざる・聞かざる・言わざる」を相手に自分は闘っているんだなって、合点したわけ。

それにしても折々に私には聞いてくれる貴方がいてくださって、それで随分と救われている、なんて有り難いことかとしみじみ思った次第です。では、この続きはいずれまた。

感謝を込めて、ご機嫌よう。

千鶴子



1995年5月31日

Prof. 清 真人さま

どうもお久しぶりです。いつぞや貴方にお届けすることをお約束しておりました『現代のエスプリー精神分析の現在』（弘文社）が予定より大幅に遅れまして、ようやく出版されました。私の拙い文章が載っております。どうぞお目を通してくださいませね。

実はと云えば、私自身この本のページをあちこちめぐりながら、内心複雑な心境であります。ああ、こんな風に日本に「精神分析」が導入されるのではどうしようもないかと、頭を抱えてしまうのです。情報レベルではそつなく網羅されているのは事実としても…。

私が貴方を得難く思われるのは、貴方のご自分故の何か必然があって誰かと出会い(サルトルに限らず)、そしてその相手を相手しながら、自分の中から必死に言葉を紡ぎだそうとなさる、その真摯な態度です。そうした‘切り結ぶ’姿勢こそを、私は今回他の執筆者各自の中に是非とも聴きたいものだと思っておりましたのですが、残念ながら手応えはまるでなくて、本当に落胆しました。どうしてこうも「主体」が希薄なのか、曖昧なのか、そのお粗末さ加減には途方に暮れます。かく言う私にしてもしかりでして、そろそろ私も貴方に倣って、ようやくにして‘声’を持つと覚悟を固めつつあります。語るべきものがあり、それを聞かせたい人がいるということが、恐らく幸福というものなのでしょうから……。

さて、話はまるで変わりますけれど、「ポーヴァワールとサルトルに狂わされた娘時代」(B・ランブラン著 阪田由美子訳 草思社)という本、ご存じでしたかしら？ 著者は或る時期サルトルとポーヴァワール双方の恋人、つまり‘トリオ’の関係を成していたとか。これは、まあ言わば暴露本の類いでもあるわけですが、しかしながらサルトル或はポーヴァワールの研究者にとってなかなか貴重な‘証言’を含むものであり、そこかしこになかなかしたたかな‘切り結び’が窺われ、私は面白く読みました。特に著者のユダヤ人という背景からして、否応もなく大戦勃発当時の世界の政治情勢に対して鋭敏にならざるを得ない事情があったとは言え、その政治的嗅覚の鋭さはサルトル並びにポーヴァワールがちょっと見劣りする程に迫力があ

り、フランス知識人に対する批判は甚だ的を射ておりました。

この本の中で実は、サルトルの性の実態があからさまになっているのですが、その‘エゴイステックで無神経な態度’というのはいさもありなんとといったところですよ。すべからく関係を相対化しようとするれば、その程度に応じて、目の前の恋人、それが誰であろうと、その‘掛け替えのなさ(絶対性)’は当然希薄にならざるを得ないでしょうから……。彼の側に自覚的な意味で何ら悪意もないわけだからいっそう、若かった彼女がその一途さからして、大いに神経を逆撫でされたであろうことは想像に難くありません。そうした恨みごととは別に、彼女がサルトルについて、「彼自身と彼の肉体、そして彼と他者との肉体の関係が正常に機能しなくなっているようだった……」と評している点が特に注目を引きました。さらには他の箇所も。「……つねに冷静な彼の頭脳が彼の精神と肉体とを結ぶすべての絆を断ち切ってしまったのだ。おそらく、肉体に結ぶつくものは、自分には無縁なものだと彼は思っていたのだろう。……」

実のところかつてサルトルの「想像力の問題」を読んでの私の感想は、痛ましい！ということでした。近代的自我の探求つまり自意識の覚醒に己の総てを賭けたと言う意味で壮絶と言いますか、ご立派とも言えましようが、その代償としてのからだの酷使あるいは犠牲の凄まじさには暗澹といたしました。実にごうした‘からだ(身体性)’の無視(もしくは肉体への嫌悪感)の実態は、私の英国滞在中

からずうっと引きずってきました西欧文化への批判(懷疑)の根幹をなしているものです。

そのきっかけとなった“事件”というのは、確か最初貴方にお目に掛かった折りお話ししたような記憶がありますが、タビストック・クリニックでのこと、『暴力なき出産』(中川吉晴訳 星雲社)を提唱するフランス人で産婦人科医でありますフレデリック・ルポワイエの講演と映画を観て、私の同僚であった英国人らがすざましい反撥・拒絶(生理的なアレルギー反応!)を示すのを目の当りにしたことです。その折りの私の違和感は、まさに自分がとんでもない場違いな所に居るといった衝撃を引き起こしたのです。つい最近のことですが、友人の薦めで「アリス・ミラー」の著書を幾つか読みました。『禁じられた知』『魂の殺人』その他(山下広子訳 新曜社)ですが、貴方は既にお読みでしたでしょうか。からだの感覚の疎外、その深刻さの裏返しの形が、まさにそうした近親姦の幼児性虐待のおぞましい実態であり、さらにはポルノグラフィーに窺われる女性に対する性的搾取であると考えられるのです。「アリス・ミラー」という人はすでにあちらでは‘政治的存在’と言われているようですが、それは精神分析内部批判に止まらず、何千年にも亘って営々と築いてきた西洋文明を根幹から否定するものでありましょう。その点においてまさにB・ランブランの著書の中には一脈通じるものを見ます。批判対象がこの場合一フランス知識人にすぎないサルトル(もしくはポーヴァワール)であり、個人的な恨みや憎悪や親愛の感情に彩られた、彼女個人のまさに失意の

記録であるからこそいっそうに・・・。

性愛的関係に限らず、人間同士がピタッと一つになって触れ合うということは、究極には相手にこちらの重みをゆだね、そして相手の重みをこちらが引き受けるということではなくてはなりません。自分をいとおしむこと(自己愛)は、相手をいとおしむこと(対象愛)と表裏一体になっていると言う事実を見逃すことはできません、つまりエロティシズムとは、エゴイステックな性的搾取もしくは性的虐待とは画然と区別する必要があります。この点をサルトルはまるで分からなかったのだということは、ポーヴァワールの『別れの儀式』の中でも彼自身が率直に吐露しております。ポーヴァワールがそうした彼にむしろ加担せざるを得なかったということが、むしろ女として哀れに思われてなりません。これは、B・ランブランの見地とは些かずれますけれども。サルトルの‘貧しさ’、それが周りの女たちを貧しくしていると思わずにはいられないし、ポーヴァワールがその例外であるはずもなく、むしろ‘共犯者’として振る舞うといった妥協を彼から強いられただけに、彼女の傷は尚更に、恐らく誰よりも、深いと思わざるを得ないのです(例えばサルトルの薬の耽溺もしくは晩年のアルコール依存に対して為す術のない苛立ちと諦め・・・)。しかしながら、またその痛恨があるからこそ、彼女は彼の生涯の‘真の伴侶’であったのだとも言えましょう。

私は勿論のこと、「サルトル」或は「ポーヴァワール」の思想的継承者とは言えませんし、飽くまでも門外漢でしかありません。しかしどうしても彼らを捨てて顧みることが

できないのは、そこに多くの‘負の遺産’がある
とは言え、やはり西洋文化とのつきあいの中
でどうしても我々が避けて通れない幾多の問題が
彼らの生きざまを通して提示されているように思
われてならないからです。精神分析家として申せば、
彼の言うところの【実存分析】は、私自身にとつ
ても近いものを感じているのです。いつか是非とも
彼の『家の馬鹿息子一フローベル論』を読んでみ
たいものです。貴方はお読みになられましたわね。
いつかまたご一緒にお話できるといいですね。

いずれまた。ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1995年10月15日

Prof. 清 真人さま

思いも寄らないことで驚愕しました。「悪性リンパ腫」と診断された由伺いまして。ああ、どうしようどうしよう…とうろたえ、貴方のお手紙を読み終わって、しばし涙ぐんでおりました。それにしても、貴方がご自分の生に(そして死に、それは遅かれ早かれ誰にもいずれ訪れるとしても…)、そんなにも果敢に対峙しうる明晰さには心打たれ、貴方の真の値打ちを私は本当にこれまで何ひとつ知らなかったのだとすら想ってしまいました。

貴方は私にとって、失いたくないと切実に思うところの一人なのです。そんな風に申し上げる以外に、今私には何ひとつ貴方を慰める言葉が見つかりません。それはおそらく貴方を愛するご家族にしても同じなのじゃない

かしら(勿論私のそれよりもいっそう痛烈に)、どんなにか辛く事態を受け止めておいでだろうと心痛む思いが致します。

さて、ここで、ガラッと調子が変わります。と申しますのは、貴方に倣ってシャキッとしなくてはと自省しまして。それに私がこんな風では、まるで慰められたいのはどっちか分からない感じになりかねませんわけでした…。それで今ついさっき、貴方も既にご存じのように、奥さまにお電話して貴方のご様子をお訊きしたのでしたのね。貴方のお顔が色艶も良く、ピンピンとしているとのこと、朗らかなお声で奥さまから伺いましたよ。どんなに安堵でしたことか。まあ、完治するには、要は根性ということらしいですから、頑張ってくださいのためにも、これから一緒に、「貴方が死んだらいやだあ～」と‘大合唱’しましょうねと、奥さまとお話したところですね。

入院を、貴方は‘別荘暮らし’と言い、奥様は‘単身赴任’とおっしゃるし…。本当に余裕のあることだと感服いたしました。それぞれが思わぬ<孤独の自由>を得て、ついでにこうした際、夫婦でラブレターの交換も悪くないぞと、私はついお節介にも内心想ったのですが。週末にはご帰宅とか…。まあまあ、いずれにしても、こうした‘逆境’の中でこそ思索の材料を豊富に貴方が見いだしておいでなのは本当にさすがだあ！という思いです。

そう言えば以前、友人から《病院に行くということ》という映画がなかなか面白いからと勧められたことがありましたが。私は根っからの医者嫌いで、お世話になるのは真っ平

御免で生涯を終えたいと願っておりますので、そのまま沙汰止みとなっております…。実は、私の父親が15年ほど前に東京の「癌研」で肺癌の手術をして命拾いをしまして、医学の有り難みは充分に分かっておるつもりですが、その不快さとともに…。でも貴方のお手紙に抛りますと、何やら一度は経験するのも悪くないかなという気がしてまいります。どこか自分だけは大丈夫といった傲慢(ヒュプリス)は一度なりとも懲らしめられる必要があるということになりますかどうか…。しかしそれでもなお、運命の轡(くつわ)・‘神託’に逆らうのが人の子であり、そうした死にも狂いでこそ獲得されるのが「実存」ということになりましょうか。大いに抗っていただきたいと願っております。

ここでふと、貴方が今回‘付録’として送りくださった論稿の中で仏映画『わんぱく戦争』に触れておいでのところが思い出されます。そのラストシーンの箇所です。二人の餓鬼大将は、その扱いに手こずった親やら教師らに懲らしめとして確か教化院のようなところへ送り込まれたんですね。そして、部屋の片隅に一人打ちひしがれて神妙に座していた餓鬼大将の男の子がいて、そこへ後からもう一方の餓鬼大将の男の子が教官に引き連れられて入ってくる。そうして彼ら、‘敵’同士は鉢合わせの恰好で邂逅する。そして教官が姿を消すや否や、二人はひしと抱き合うのですが、それは貴方が記憶なさっておいでのように「もう俺たちは奴らのものになっちゃったんだ」という悲壮な嘆き、つまり懲らしめに従順に承服せんとする素振りなどでは全然なくて、

私の記憶ではむしろその逆で、「おとな(奴ら)なんかまるで分かつちやいない！」と確かおとなを揶揄する口ぶりで誇らしげに叫んで、期せずして一緒になれた喜びに酔いしれて、二人で部屋中を跳びはね、喜々として駆け回ったという具合に映画は終わった。つまり彼らは全然懲らしめに懲りてなんかいない、それどころか、おとなが彼らに強い懲らしめという‘筋書き’の裏をかいたということ、その懲らしめなる運命を彼らは‘祝福’としたという意味で、これは子ども側の‘勝利’なのでしたよ。私はその時、愉快で思わず大笑いしたのを覚えております。(どっちの記憶が正しいか確認しなくては…。貴方、この映画のビデオ持ってます?)

その真偽のほどはともかく、ここで肝心なことは、まず私の読んだ‘筋’で申せばですが、子どもとは常にこうしたもの、つまり「オイデイス」なのだということです。そこに大袈裟ではなく、人類が《神話的世界》から脱却し、個としての意識に光明を得んとする精神的営みの萌芽を感じるのです。今回貴方の手紙にも同じものを見たこと、つまり運命という《神話》的力の呪縛に抵抗する自由なる意志の人を見たことで、私は敢えて愉快さを感じたと申し上げても不謹慎ではなからうという気がするのですが、如何がでしょうか。

さて、私は知らずに貴方の‘孤独の自由’に割り込んだ恰好になりましたのですが、今回貴方から又々懇切丁寧な長文のご返事をいただきまして恐縮いたしております。例のサルトルとトリュフォーとの交遊については驚きでした。確かに、かつて眼を通したトリュフォーについての文献の中のどこかに一箇所、

「サルトルを愛読した…」といった素っ気ない短い文があるのはあったのですが、教養の域を出ないものと思わなかったのが迂闊でした。そうなんですな、どこかでこうして誰かと誰かとは会うべくして会うのですな。

実はね、私先日お送りした手紙を綴りながら、これはボツにしなくてはならないかなといった思いが湧いてきたの(つまり貴方にはお送りしないということ)。何故かと言えば、サルトルの話からトリュフォーというのが一見唐突に思えたり、貴方が彼を知ってるという確証もなし、それに東京でたまたま「フラソワ・トリュフォー没後10年追悼上映」という企画が『三百人劇場』であって、何故か彼のファンでもなかった私が大した予備知識もなしに、今回上映された映画を次々と見るに至ったという、それは最近の私のこだわりでしかなかったわけで、私にとってそこに何らかの‘脈絡’が読めたとしても、個人的経験レベルのことではしなくて、貴方と共有し得るかという点では疑問があり、一人善がりな気味がなくもないからといった危惧があったのです。その予想が嬉しくも裏切られ、貴方からのこれ以上ないほどの反応を得られたことで、どんなにか安堵しておりますことか。私は自分の直観を信じていいのかなって…。

さて、ここにお送りいたします写真集ですが、どうして？って思われるでしょ。実は貴方が病床にあると伺って、何か慰めになるものをお送りしたいと思ったのね。あれこれ思いついたのですが、まあ取り敢えずと真っ先に思

い決めたのが、これでしたの。私にも実は、どうしてこれなのかよく分かっておりません。‘直観’を信じたまでのことというわけなの。夏頃に東京で《戦後50年記念写真展》があちこちで催され、それらを見て歩いているうちに眼に止まったもので、今回わざわざこれを求めて新宿のニコンフォトスタジオに行って、あっ間違えた、渋谷だったと引き返す途中、あちこちついでに写真展を物色し、ようやく渋谷の『ミノルタ・ドイフォト』でめでたく手に入れました。どうしてもこれって、結構ご執心があったみたいなんですよね、何故か…。小難しい講釈はこの際わざと省きますので、貴方がどんな感想を抱かれるか、それを伺うのが楽しみですという無責任な呼び掛けのままにしておきましょう。

最後にちょっといい話。原宿駅の道路向かいに《積雲画廊》がありまして、ちょっとした気まぐれを起こして、先日通りすがりにふいと中へ入ってみたのね。小鳥たちのアクリル絵が展示されていて、なかなか可愛い、楽しいものでしたの。ここにその一つ、絵葉書を同封しましたが…。絵の方は殊更めずらしいとかすぐれているといった印象ではなかったのですが、でもね、むしろテーブルの上にずらっと並べてあった木彫りの置物が、何とも独特の味わいで、魅了されましたの。いずれもが樹々に小鳥が、或は梟や鶯などが止まっていたり(或は、彫られてあったり)の具象ものでしたが、どれもが木のそのものの素材の妙がうまく生かされてあって、素朴で生きた味わいがある、鳥たちの何ともチャーミングなこと！そこにいらした作者の「やまもと正臣」という方に直接伺ったのですが、

それら材料は、荒川河川敷でご自分で拾った木切れなんですって（いろんな落ちてるクズの中から、掻き回して探すんですって）。<かつては、それらも樹木として鳥を止まらせたこともあったろう。だから、今こうしてまた止まらせてあげようと思った・>とおっしゃるのね。これって、凄いいと思いませんか？！ 生あるものへの哀切さが滲み出ているような言葉ですよ。感傷性がないのがとてもいい。かつて樹木に巣くって棲息していた鳥たち、それが今はもう影もかたちもない。そして樹木すらも…。そしてただここに目の前に居並ぶものらが、それらの滅びを証言している。かつての生の喘ぎも痛みも時の流れに洗われ、いつしかその鋭さ・頑なさも削られて、今はただ記憶された生命として、まろやかな恩寵の温もりにひたすら憩っているように感じられたのね。ここに『鎮魂』の一つのかたちを見る思いがした。宗教的な何かとっていかしら、それも日本的な…？ 作者の方がこれまた傑作という失礼なのですが、飄々とした、まるで、実にそう、一片の‘流木’みたいな方なのよ。背が高く、痩せていて、チョビ髭を生やしたご年輩の方なんです。ああ、こんな風にして、彼は彼にできることで、この世の中に‘捧げもの’をしているんだあって、それがとても貴いって、私感じ入りましたのよ。そして、ああ、私も頑張なきやあなあって励まされる思いがした。それが殊の外嬉しかったのです。

それから、貴方が今回お送りくださった封書に記念切手をお使いでしたが、その‘縄文杉’の風景がとても良かったですよ。貴方の<こうなったら何百年も生きてやるぞ

お！！>といった、生命の逞しさをそこに見るような気がしましたのね。

それでは今日はこれぐらいで…。
また直におたより致しましょう。

千鶴子



1995年11月13日

Prof. 清 真人さま

貴方の意気軒高なお声が聴けたことを、とても喜んでおります。貴方の云う‘演説’、それも大いに結構です。貴方の同室の患者さん方についての観察から、病床にあって病人以外の何者でもない自分になることに逆らい抗うことがどんなにか至難なことかを教えられました。そのように扱われれば、それに甘んじるのが普通の人なのでしょうから、貴方は確かに‘普通’ではないのかも知れませんが、有り難いことにね(！)。

私は常日頃、自分が心理臨床家でありながら、‘病人嫌い’なのを内心困ったものだと思っておりました。時折病院などの医療機関からこちらへ分析治療を勧められた方々のご紹介があるのですが。どうもそうした‘患者さん’をうまく扱うコツが私には判らないらしいのです。(実は、アマノジャクな私が、本当はね、分からないフリをしてるだけなんだけど！) 病人であることに馴れて馴らされてしまった病人以外の何者でもない人たち、その彼らの期待通りに私が付き合わせられるには、あまりにも私は、人間の可能性というものについて挑戦

的なんだと気づかされます。哀しいことに、彼らには、それは‘要らぬお世話’でしかないわけで…。そんなことですから、時折私、自分にガツカリ致します。勿論‘外野席’からの非難の声を耳にすることがなくもなく…。だけどどうしても譲れないとする自分の頑固さに、時折私自身辟易したりなわけなのね。でもね、「自分との馴れ合い」、それに鉄拳を食らわすことがそもそも精神分析の存在根拠ではなかったかという思いがありますの。だから、こんな風な貴方の‘演説’を伺いますと、貴方に改めてとても愛情を覚えますし、それと共に私自身にとって大いに励ましになったことを是非お伝え致したく思います。

今回の貴方のおたよりから、又々いろいろお話ししたい事柄があれこれ思い浮かびましたけれども、今日は取り敢えずここ迄に致しますね。実は、私もようやく折り返し地点に辿り着いたと申しますか、最近この住まいの内装を新しくしまして、身の整理に手を付け始めましたら、途端に部屋中モノが散乱して参っております。それでちょっぴりくたびれておりますのね。それに予定外の訪問客がこのところ続いたりしてますものですから…。それで取り急ぎ、これだけのお手紙をお届け致しますね。この続きは、いずれポツポツ書き送りましょうほどに、どうぞお楽しみに…。

さて私は今から、新宿の《朝日カルチャーセンター》での【画家・自作を語る】という連続講義を聴講しにまいります。これは、或る人がまさに生きたというその時間を、その

方の手掛けた作品を媒介として‘巻き戻す’ことの面白さがございます。毎回この講義ではそうなのですが、表現に憑かれたとも言えるこれら画家たちを、私はやはり愛さずにはいられないといった気分を抱きますの。そしていつも、いろんな刺激に衝き動かされ、励起させられるように思われ、とっても愉しみな時間なのです。

貴方が病床にあって尚も、生きてることの証としての表現を追究せんと意欲し、決して倦むことのない、貴方のその精神的な勁さ・快活さを私は愛しておりますよ。それは必ずや、周囲の誰彼にとって、有形無形の‘恩恵’としてあるということになりましょうほどに、どうかそのままで…。そして、どうぞご機嫌よくいらしてください。

千鶴子



1995年12月21日

岩崎 美枝子さま

先日は大変にご馳走さまでございました！随分と久し振りに目に掛かったのですが、全然まるで時間の隔たりを感じさせない貴女がいてくださって、とっても嬉しかったです。勿論、『家庭養護促進協会』の理事というお立場でいらっしゃる貴女の、その根性の座ったケースワーカー魂にはあっぱれと感服すること頻りなのですが。まったくのところ、いつも変わらない貴女がいつものようにそこにいてくれるってことが、どんなにか多くの里親さん・里子さんたちの慰めになっているか、心底解ったような気がしましたのよ。

あれからいただいたご本をあれこれ面白く拝読させていただきまして、ああ、私の知らないところで、いろんな人がいろんな立場で奮闘しつつこの世を支えているんだなあという実感がとても頼もしく、私自身は日頃どうしても‘守り’に傾き易いものですから、もっと撃って出るとか攻めてゆくとかしなくてはいけないのかしらって、ちょっぴり小突かれているような辛い感じもありましたけれどもね。これ迄はこれで良かったという思いはしていても、これからはさてどうしたものかと思案中なものですから…。何と言っても孤りということは気楽さに流されやすいということでもありますから…。

最近【朝日カルチャーセンター】やら「沼田曜一」の《語り塾》やらで、本当にいろんな普通の人たちとの交流する中で、彼らの話すのを聞きながら想うんだけどね。皆さん、誰もそんなに気楽じゃないということ。一人一人が揉まれ揉まれて生きているということ。それでそれぞれが身に付けた‘殻’というか‘個性’で自分を必死に「わたしは、わたしは……」って訴えてるってこと。それだからなお人は人からはぐれてしまう場合もあり、或はまた人と出会えたという場合もあり、いろいろみたいですが…。何とも人というのは、おどろおどろしく厄介なものなんだなということを今更にして実感している。心理臨床の中では、私も相当ズバズバモノ言う人間だと思ってましたが、それは患者さんがおとなしく聞いてくれるからだということがようやくにして分かったというか、大概のところはそんな風にはいかんもんだということも分かったのは良かったと云えましょう。まあそれは分かっていたからこそ、これ迄ここから一步も出てゆこうと

しなかったということなのですがね。実妹が小学校の養護教諭で、日常の業務として不登校児の親の面談をしているらしいのですが、その相手との通じなさを嘆くのを聞きながらも、自分がとても気楽なところにいるってことがよく分かるのね。貴女がからだを張って耐えてらした、ケースワークの現場でのこれ迄のご苦労についてもそう…。

実はイギリスでの研修を振り返って思うんですけど、恥ずかしながらまるっきり無手勝流でがむしゃらに過ごしたみたいなの（つまり西洋思想に自分の視角でもって切り込むべく理論など一切皆無でして）、ただわけもなく鵜呑みにするか、或いは感覚的に肌合いが合わないとかしっくりゆかないとかばかりで、そのまま逃げ切って帰国したような、そうした何とも‘荒削り’な自分が厭で我慢できなかったという気が致しますわけ。ですから、それからがまさに大変で、おとなしく誰彼の言うことを聞くのがそんなに厭なら、自分でやって見ろ！ということに落ち着いたわけでした。それがまさにここ原宿で15年間余の臨床一筋の私であったように思われます。誰の導きも干渉も無しに…。

とは云っても、どこかで誰かの期待を背中に感じていたふしがなくもないのですけれど…。『ピオン入門』（岩崎学術出版社1982）の《監修者まえがき》に小此木啓吾氏が私を紹介してくださってるわけなの。「…現在の私にとっての課題は、山上女史の語る言葉を読みとることのできる言語環境を逐次わが国につくり上げる仕事である。…」こんな風に文面の最後におっしゃっておいでなのです。確か

に、臨床の場で機能し得る(日本語による)『精神分析言語psycho-analytical language』とは如何なるものかが、私のライフワークとして帰国当初から実に私の年頭にはあったのですけれどもね。それについて小此木氏がこのような理解を示してくださっていたことに、或る種の驚愕と感銘を私は覚えたのです、戸惑いを残しながらも・・・。

私は、自分を執念深いなど思っていたことないんだけど。大概のところぼんやりしている私なのに、それが何かのきっかけで自分でもそれと気付かず、憑かれたように引っ込みが付かない事態へと引きずり込まれてゆくみたいで・・・。「魅せられた魂」としか云いようのない、そんな自分をこわごわ眺めている自分がいたりするの。小此木氏とは違って、私は学問的な貢献といったことには関心は動きませんし、彼のように此の国で精神分析業界の‘オーガナイザー’を自認なさっておいでの方に特有の‘時流’というか風向き次第で右顧左眄するということも生来的に私らしくありませんわけです・・・。

唯どうしても「精神分析」は何を為し得るのか、どういう人間を創ろうとするものなのかを臨床実践の中で見てみたいということに尽きるわけなのです。つまりは「臨床言語」の探求ということなのですが、それが少し見え始めたところで、その見えたものを外部にどのように伝達するかという次のこと、つまり「解説言語」に取り組もうとしている、それが私自身の中の最近の変化と言えます。その為にあつたのは当分の間、仲間内で皆さんとご一緒にす

るのがよいと思われまして、ようやくセミナーなどの講師を頼まれれば引き受けるということにしています。後で皆さんからご感想を届けてくださったのを読みながら、通じないばかりでもないんだなあということで慰められたり励まされたりしております。しかしながら皆さんの臨床の実際は、私のような気楽なものではありませんようで、現場感覚はもっとゴチャゴチャ混沌としてるといふか、下手すれば自分の‘生き残り’が危ういということになりかねないようで・・・。そんなわけですから、その都度いろんな人からいろんな助言をいただいて、その後は自分の状況に照らし合わせて切り捨ててゆく、そんなのが実情のようです。そうしたツギハギの限界は臨床現場特有のものであり、同時に個々人のものでもあり、なかなか一筋縄にはゆかないということみたいです。こうして外へ出てゆけばゆくほどに、私は自分の孤独に舞い戻るといふことになりかねないのですけれどもね。まあ、ここ当分はこんな調子でゆくことになりましょう。

正直申せば、本来の私は性格的には決して‘我が強い’とは到底言い難い。むしろ従順という嫌いがあって、そこら辺りの‘いい子ちゃんdocile’な私にうさん臭さを覚えて忌み嫌っている。どこかしらとことん自分の‘受動性passivity’を危惧し、抗っている。下手すれば思慮なくして誰かに‘都合のいいひと’になるだけ、そうして自分の生が不徹底になることがたまらないということなんでしょう、おそらくね・・・。

あのね、貴女は「堀文子」という日本画家をご存じですよ。昔から挿絵などで

有名な方なんですってね。その方に先日お会いしましたよ。『朝日カルチャーセンター』の【画家・自作を語る】という講座でしたんですけど。それが偶然に美容院で「婦人画報」の12月号を手にとったら、彼女の特集記事が載ってまして、まあまあその大した気骨に惚れ込んで、これは見逃してはならないと出掛けていったんですけど。とても美しいお方でしたの。イタリアのトスカーナでのお話し。赤いポピーが群れ咲く麦畑。農夫ですら風景を愛してやまない。それに比べると日本人の功利性はすべてそうした‘無駄’の一切を切り捨ててきて、その結果が今や惨憺たる風景しか残っていないと文化批判。それから厳寒の軽井沢で、狐を餌付けした話し。とても神経質で決して人間に馴れようとしな、品のいい(!)動物なんですって。必ず独りで来るんですって。それは狸と対照的。馴れると必ず彼らはゾロゾロと家族でやってくるって。だから狐の方について肩を持つちゃうって。「私はファミリーがないから……」って。そんな風にちょっぴり拗ねた風な口調で私達を笑わせたりなさって…。馴れ合うということがお嫌いなそうです。画壇とも一線を画しておいでですし……。私ね、あんなこと初めてでした。お話しを伺ううちに、涙が出て止まらなくなったのよ。その穢れなき孤高の精神というか、そんなお年になるまで、お独りでいじけずに果敢に気丈に生きておいでで、こんなにもしなやかでかつ美しく有り得るんだということが、信じ難いような…。おそらく内なる秘めた焰に翻弄されつつ、なお頑固一徹で、かつ情け容赦のない冷徹さももありということなんでしょう。まさに初期の作品の「シャモ」は、彼女の自画像で

もありそうです。その凜とした気迫がね、なお廃れていないのはあっぱれというか、とてもすてきなものでしたのね。今もね彼女を想うと涙が出るような、懐かしくって熱くなる。でもでも思ったよ。これだけ泣けて泣けて仕方ない私って、やはり孤独で寂しかったのかしらねって。それって良くないぞって…。彼女がね、会場に詰め掛けた往年のファンなる人達を前に、＜自分を誰も知らないって思っていたのに、こんなにたくさんの皆さんがお越しくださって…＞と、その驚きと感激を吐露されたのね。私、ふと思ったの。とかく信念に殉ずるといった気概を持つ孤高の人って、いつしか素朴に自分が誰かから求められているかも知れないといったことには疎くなるものかな、信念も良し悪しだなんて…。

今回、貴女からご両親のことやら結婚に至るまでの異性交遊のあらましを語っていただいて、とても深く考えさせられました。自分がどういう女として生きられるかは、どういうパートナーを選ぶかで大きく左右されるってことかしら。貴女が最終的に選んだものは‘自由に飛翔する女のわたし’であり、それは或る意味で当時は貴女自身に逆らい抗うところの‘賭け’とも云える何かであったかも知れない。でもそうでなければ自分は自分ではない、息苦しくてならないって‘声’に忠実で従ったということになるのかしら。私も今ね、実はそんな気がしている。私は結婚という選択はしないし、だからこれからの行く末についてはそれなりに厳しいものを覚悟してるけど、悲観はなくなった。それもごく最近のことだけど。それはおそらく、異性との友達つきあいができる自分になれたことで、女で

ある自分が十分に‘支持’されているといった安心なり穏やかさが保証されつつあるからといったことかなくて、ふと想う。私の周囲に実に魅力的で面白い顔触れが出揃ったのよ！そして実際に自分がね、俄然ますます男っぽくなりつつあるわけなの。それは即ち、己が背負っているものを自覚し始めているということでもあり、もう自分以外の自分にはなれないといった覚悟でもありそうです。これって悪くないぞと内心想ってる。

話しは違いますが、貴女がいつぞやアメリカにお住まいのサイコロジストのお話しなすってたでしょ。娘さんが自分の出産状況について逐一記憶していることを催眠下で証明するのを目の当りにしたってことだけど…。

実はね、最近ある症例を聞く機会があったのだけど、その若い女性(大学生)は、以前からよく母親に出産の際に臍の緒が巻き付いていたという話しを聞かされていたとか。かなり神経質で過敏に不安に反応しやすい、どちらかと言うと過干渉タイプの母親のようですが…。現象的には、その母親からの分離がテーマになっていたとも言えまして、実際彼女が家から離れて下宿し始めてほぼ直後に、意識混濁状態に陥り、即入院となったわけでしたから…。その学生相談室に関わりを持つ迄にもいろんな臨床機関をあちこちと掛け持ちしているみたいでして、奇妙なことに‘入り口’は分かるみたいらしく、どこにでも結構平気で潜り込んでゆけるのですが、それ以降どこでも誰とも関係らしい関係を結べないままに、どれもがまったく中途半端に尻切れトンボになっちゃうわけ。

(つまりね、‘始まり’はあるけど、‘終わり’はないわけで…)それは、まるで‘出口’を怖がっている(!)みたいなのですよ。これが彼女が語っている臍の緒にまつわる物語りに所以するものなのかどうか、証明する術もありませんが、少なくともそうした物語りの「反復強迫」の堂々巡りと考えれば、治療方針の立てようもあつたはずだという一抹の無念さが残りました。

貴女のそのアメリカの友人はまさに‘治癒させる’ためにはいかなる手段をも‘戦略’をも講じるといった見解をお持ちだと伺いましたが。とにもかくにも、それはこうも読める、ああも読めるといった「読み(筋立て)」を多様に手元に確保してあればあるほど無論いいわけで、その意味でも、いつかその彼女とお知り合いになれる機会があれば嬉しいのですが…。いずれよろしく、どうぞね。

こんな風に長々といかにも女同士のおしゃべりをしてしまいました。貴女と一緒にした例の会席料理、とつてもめずらしく美味でしたわよね。御馳走さまでした！ぜひぜひ又いつかね。これを機会に‘続きあり’を続けてまいりましょう。

最後になりましたが、貴女の手術後のおからだ genuinely 大丈夫回復なさっておいでなのかと案じております。無理なすってはだめですよ。まあ、テニスを止めろと言っても聞かない貴女のようなので、それは言わないにしても…。くれぐれもお大事になさってね。そして、どうぞ来たる年も幸多き年でありますように。ご機嫌よろしく。 千鶴子

.....



1996年1月10日

山谷 哲夫さま

お年賀状、有り難う。貴方の第一声、〈なつかしいですね〉という言葉、とても貴方らしく率直さが文面に溢れておりまして、随分昔にロンドンの或る映画館の玄関口でしたか、貴方に初めて声を掛けられた、あの時の情景が彷彿としてまいりました。〈記録映画監督です・・〉と名乗られて。貴方は文化庁による派遣でロンドン留学をなさっておいでで、精力的にあちこちの映画館を物色なさってましたようで。私の方は、たまたま当日Dr. R. D. レインのドキュメンタリー映画が上映中なのを見に行ったわけでしたが。あの当時Dr. レインは、「反精神医学」の旗手として、精神分裂病者の治療拠点を精神科病棟から‘地域’へと移すキャンペーンを大々的に展開していらして、そのために物議を醸しながらも、敢えてご自分の身を公の場に曝すことに果敢に挑まれておいででした。懐かしい思い出です。

さて、相変わらずのご発展のご様子と伺いまして、とても嬉しく思います。私の方はいかがお過ごしですかということですが。私は無事にと言いますか、奇跡的にと言いますか、精神分析家としてここ東京・原宿でどうにか生き延びております。ひっそりと唯一筋に分析に明け暮れして、内に籠りがちでありましたけれども、最近こらでひとつ躍進をということで、恰好の「助っ人」が現れたこともあり、いろんな刺激から‘外’へと眼が開かれつつあります。

実は今年の夏でしたか、或る方（社会心理学の専門で、フィールドワークを得意とされる方なのですが）に誘われて、武蔵小杉の『映画100年記念映画祭』に出掛けてまいりましたの。貴方はおそらくご存じでしょう、「吉村公三郎」という映画監督。その方の対談に引き続き、彼の作品『夜明け前』及び『襤褸の旗』を觀賞したのです。ご覧でしたか？これがもの凄かったのです。どちらも殆どドキュメンタリーかと思えるほどに画面に気迫が漲り、真実味がこもっておりました。改めて日本という国が辿ってきた苦難の跡の一端を知ったことになり、あまりにもこれまで歴史に疎く無頓着であった自分を思い知らされ、骨身に堪えました。前者は島崎藤村の原作ですから、多少は承知してましたが、後者については、つまり「田中正造」という、足尾銅山の公害訴訟のために生涯を費やし、官憲と闘って死んだという実在の人をまるで知らされずにきたことを私は口惜しく、また深く恥ずかしくも思いました。そして歴史は繰り返すと言われますけれども、公害訴訟を一つ挙げて、実に目の前のその画面上に現れる出来事の一つ一つがフィクションなどではなくて、まさに今も現実に実際起きていることとそっくり違わず重なり、何ともショックでした。歴史から我々は何をも学ぶことがないのかと、人間の愚かさを痛く思い知ったのです。何と簡単に人は忘れてはいけないことを忘れてしまうものかと。だからこそ人の記憶がそんなにも脆くはかなく色褪せてしまうものでしかないとしたら、忘れてはいけないものを忘れてはならないと言う意味の警告を込めて、文書でもいい、映像でもいい、記録しておかねばと思

いましたのね。そこで記録映像作家であります貴方のことを、健忘症の私の薄ぼんやりした記憶の中から久々に引っ張り出したという次第でしたの。

さて、話しはガラッと変わります。元々、幾分か私は反・文明的なものがありましたけどね。昔、貴方に私は「毛唐嫌い」だって言ったのを覚えてます？最近私は益々、人として生きることが大地との繋がりから隔たりを深めているのではないかといった危惧を抱いております。貴方がオーストラリアに強く魅せられておいでということも、もしかして‘大地への回帰’という点でなのかしらという風に理解しましたけど、どうかな？ いつか機会があれば、お聞かせくださるかしら？

ここにそれとの連想で私の身近での出来事二つ、貴方にお話ししましょうね。

お正月休暇で帰省しました折り、元旦の朝、父親のお伴で京都の東寺の恒例ガラクラ市へ出掛けてまいりましたのね。そこでもの凄いものに出くわしました。「山サンゴ」と呼ばれるもの、貴方はご存じでしたかしら？何と、かつてチベットが海底にあった頃のものだそうですよ！ それらの珠は洪くサンゴ色に艶めきながら、荒削りの細工ではありましたが2、30個ほど数珠になっており、虫食い風に黒が混じり、大した凄味を放っておりましたの。手のひらのズッシリとしたその重みは、まるで大地の靈氣にからだごと浸されるような興奮が走りました。お正月早々何て縁起のいいことと小躍りしながら、こんな風に大地と繋がっている生命に

触れることが現代人の疲れた心からだにどんなにか癒しとなることかという風に感じられましたのね。私はトルコ石やらラピスラズリなどの原石が大好きでしたが、今や山サンゴが加わり夢中です。さて、貴方もオーストラリアの奥地かどこかで、そんな石との出会いがあったらいいですよ。たぶん大地の風の音とともにね！？

それから、貴方は情報通でいらっしゃるから既にお知りかと思われませんが、《阪神大震災義援写真展 & チャリティーオークション》(1/9～1/14)が日本橋・三越百貨店で催されております。この写真展、私つい昨日出掛けてまいりました。430点ほどもある出展作の中で、これはいいと思われたものはほんの5、6点ばかり。何と言いますか、作品という囚われの中に、或は「これが芸術だあ！」の気取りの中で、被写体の息吹きが、またそれを媒体としての作家と観客との間の共振(共鳴)が封じられてあるというのが全体の印象でした。つい思わず知らず眉をひそめながら見ている自分がおりましたのね。技術(技巧)の卓越性がむしろ芸術の生命を枯らしてゆくことの皮肉が痛ましいと思えてしまった、そんな感慨でしたの。

J・N・ユルズマンのモンタージュ写真などは例外と言っていいかも知れない気がしましたけれども。洗練された技巧と詩情が相俟って潤いのある画面構成となっているという点でね…。それからエバスチャン・サルガドの「エチオピア」(砂漠の流浪民を撮ったもの)は、圧巻でした。大地の息吹きと人間への愛が画面にしみじみ哀しくも溢れていたという意味でね。

でも全体には、技巧性においては劣るとしても、どうもアジア系の作家のものに生命の躍動がより強く感じられたと言えるのが不思議でしたの。韓国からの出品の中に4点、舞踊する人をテーマにしたものがあって、強烈なインパクトがありました。男の舞いは烈しく地を蹴って跳ね上がり、宙の一点にその姿を凝結させる。女の舞いは、その袖をそしてその裾をして空に流麗なるうねりの軌跡を描く。まるで大地と戯れているかのような、並外れた生命の歓喜が伝わってくるようでしたのね。それは他の西欧の作家にはもはや見当たらない何かなのです。おそらく芸術作品としては‘素朴’ということになるのでしょうか。

まあ、こんなあんなと最近感じたままを綴りました。さて、貴方はどんなことに今‘燃えて’おいでなのか、お暇があればぜひお聞かせください。

ではいづれ又。ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1996年1月22日&2月5日

Prof. 清 真人さま

貴方からのおたよりが、ちょうど私からの貴方へのたよりと擦れき違いの恰好で届きました。抗癌剤の副作用を心配しておりまして、お辛いのではと、それについてお慰めにと三岸節子の『囚』の絵葉書をお送りしたようなことでしたが、さほどに生活にも支障なく、随分とお元気そうで、私はむしろ拍子抜けし、でもとても嬉しく安堵しました。

さて、貴方の退院後のご自分の心の動きについて観察なされた事柄のあれこれ、とても興味深く読ませていただきました。なるほど・・・という想いがあれこれ過ぎりましたので、ここに幾つか綴りましょう。……

貴方が退院後、ご家族の中で寛ぎながらも、どこか心の奥底に澱のように巣くう悲哀をお感じになられておいでの由。貴方の意識が貴方のいうところの‘幽体離脱的空間’に彷徨(さまよ)っている。貴方は家族を愛してる自分を疑いたくない、疑われたくもない、そして事実それを疑う必要など無いのですが。でもどこか以前とは違う、貴方のからだ周囲との‘亀裂’を感じて、戸惑っておいでなのでしょう。「彼岸」からの生還を果たした者が「此岸」に到着しての戸惑いとも申せましょうか。でも究極には‘ここ’こそが自分の居場所であることを改めて自ら納得させてゆくしかなく、それには相当手間取るかも知れないわけなのね。おそらく幽愁と呼んでいい感情、それを飼い馴らしてゆくことでしかありませんでしょう。その幽愁とは即ち、「四角い檻」を剥離された後の虚脱(素裸のわたし)、そして「四角い檻」の中に又もや舞い戻った己が味わう違和感(囚われのわたし)というふうには喩えられないかしら？ それらの狭間で葛藤する「わたし」は、否応もなくどこかしら阿修羅の憤怒の形相を呈しましょう。それは、貴方が貴方の優しさ故に曖昧にせざるを得なかったところの自己感触であり、同時にそのもやもやとした曖昧さの向こうに見えるものを明晰に予知して貴方が「闘い」と呼んだところのものだと察しられました。いかがかしら？

私が貴方への年賀状に綴った事柄覚えてますか？うろ覚えですが、確か「貴方は、ご自分が自分のものであるということ、そして同時に誰かのものであるということに深く思い至られて、そういう意味で貴方はとてもいい人生の折り返し地点の通過をしたのではなかったかしら」といったような文面でしたよね。でもふと一瞬思ったの。ここでは(貴方は)誰かのものが(私の立場としては当然)強調されているわけですが、でももしかして(貴方の気持ちの中では)自分は自分のものでしかないといった思いがむしろより強烈に体験されておいでではなかったのかしらということをして…。だから、今回の手紙に綴られておいでの、誰にも話せないでいるという貴方の動揺が実によく私には解る気がいたしましたのね。

久し振りに私の中で封印してあった或る苦渋にみちた思いが回顧されましたの。貴方がまだ充分に意識しておいでではなさそうですから、こんな話どうかという気もしますが、**自分が自分のものであり、同時に誰かのものである**ことに紆る、即ち自由・不自由に紆る相克についてです。そのどちらに傾斜するにしろ、でも現時点ではむしろ自分が自分ではない(誰のものでもない)に焦点を合わせているつもりなのですが…。そこに微妙に「剥奪感→悲哀→憤怒」というものが潜んでいる事実についてです。それは、小児的怒りっぽさと言っていいような、とにかく非合理的な(理屈に合わない)駄々っ子のような、気持ちの纏(もつ)れについてです。

さて、思い出したことというのは、2つあります。まず最初のは、私自身が7年余の

英国での研修を終えて、帰国した当初の気分についてです。それは、私が自分の家族に対して何ら愛情を覚えないう自分を訝しく感じ、些か戸惑ったという記憶です。そこにはもはや義務感しか残ってないという自分を認め、啞然とするしかなかったのです。それは今にして思えば、病理学的に言えば一種の「離人感」だったのでしょうか。まるで戦場から娑婆に戻ってきた兵士のように、グダグダに疲労困憊したからだを心を抱えて、かつて経験した事柄を誰とも分かち合えない困難さの前に、躊躇し怯み怖じけて、しかし尚、娑婆には自分の居場所を見付けられずにといった具合で、自分の殻の中に閉じこもってしまったということなのかも知れない。でも実際は、当初でも傍目に映った私は、実姉などが申しますには、精神分析家として何か新しい動きを日本で私が起こしてみせるといった気概に燃えていたそうで、むしろ当時はそうした気負いに支えられていたとも思われます。でもそこにはあんなに良く尽くしてくれた両親に対してすらどこか心密かに「あんたたち、何んなのよ！ 関係ないでしょ！>と叫んでいるような、冷やかさ(埋められない溝・距離感)があったのです。それが精神分析の(英国滞在のもたらした)結果だとしたら、何もかもすべて失敗だったと苦々しく悔いつつ、私は自らを深く憂いておりましたのね。自分を許せないという思いとともに…。だからこそ、この15年ほどの‘蟄居生活’が必要だったのです。それは、「関係ナイ(疎外)」から「関係アリ(繋がり)」の世界へと自らが帰還すること、つまり心の亀裂を修復するために費やした年月と言えましょう。

そして2つ目の連想ですが、貴方もご存じでしょう、例のユング派の分析家として有名な「河合隼雄」という方のこと。私は若い頃に京大であの方の講義を何回か聴く機会がありまして、その度に何と雑駁な！といった印象しか残りませんで、決してお近づきになることがなかったのです。彼の京大・教育学部の中での専制君主ぶりをあれこれ聴いておりました、その感心しない噂のせいばかりでもないのです。それが或る日のこと、テレビのNHK教育で彼の退官記念講演が放映されましたのね。相変わらず雑駁な印象でしたが、とにかく言いたいことのポイントは、「無意識」とは、何らかのコンステレーション constellation（つまり貴方も興味がおありでしょう、物語性）を有するものだといった見解のようでして、或る男性患者のエピソードを語られたのですのね。それは粗略ながらもまずまずの出来でしたの。それからそれに釣られるように、連想されたご自分についてのエピソードをそこで語られたのです。それは彼がスイス留学を終えて、めでたくユング派の資格を取得し、故郷に凱旋した当時のお話です。親類縁者が集まり、彼のために宴席をもうけてくださったんですって。そこで或るところでもない事故が起こったって。つまり彼の老いた母親が祝宴の席で鯛の骨を喉に詰まらせて苦しんだということなの。更に、それから祝宴が終わり、辞去する際に、彼が車に乗り込みながら車の扉を閉めようとして、傍らに見送りに出ている老いた母親の手を扉に思わず挟みそうになったということなの。それでね、そのときの自分の気持ちの動きを、彼は自分の母親へ向けられた‘攻撃性’として解釈したの(変でしょ！)。

そして何とも訝しげにこうおっしゃるのね。<あれほどの歳月を掛けて、分析を受けてきたのだから、まさか自分の中に、そんなもの(攻撃性)があるとは思えないわけだけど…>だってさ！私、笑っちゃったのね。何というおめでたい人なのかしらって…。

とにかくにも、この河合隼雄氏のまるで脈絡を欠いた話などはどうでもよろしいのです。私がここで貴方にお伝えしたかったことは、彼の中に私と同じ「小児性」(おまえなんか何だ！関係ないやんか！)を見たということなの。つまりね、「依存対象への甘え、それを断念するための攻撃性(破壊性)→自立性の確立」といった図式においてね…。それでね、まあ確かにおそらく彼はスイスで大いに辛酸を舐めたであろうし、だから心細くて、頼り無くて、誰かに甘えたかったといった気持ちがなくてはなくてといったこと、だからそれに耐えて日本人で初めてユング派の資格を得たということがどんなに誇らしく威張りたいことか！！ウンウン、分かる分かるといったところですよ。でも待てよ、留学中彼には確か妻なる人が付き添われていたはずだから、まるで独りだった私なんかよりはまだましよね、贅沢言ってるなって、私としてはちょっと意地悪な気分もあつたりして…。まあ、そんなところですよ。

こんな風に、貴方からのお手紙に触発されて、あれこれ綴りましたけれど。日付でお判りのように、この手紙、実は間を置いて2日掛かりでしたの。書くことの筋立ては決まっていたのですが、何かちょっと辛いものがあつたようで筆が遅々として進まずでしたの。

さて、それでと・・・これが貴方にどの
ように伝わりますか、この続きは貴方に委ねる
ことと致しましょう。ただ私としては、貴方が言
うところの「闘い」に存分に貴方がよく闘われる
ように祈ってますということ、それが貴方に伝わ
ればそれだけで十分なのです。この場合、闘い
というのは、正しく自分が立ち戻るべきところ
(人たち)へと帰ってゆくことです。それは必ずし
も誰しもが成功するとは限らないのです。多く
の人が途中で頓挫して果てているのですも
の・・・。

さて最後にひとつ、嬉しい話を・・・
セバスティン・サルガド写真集【人間の大地
労働】(岩波書店 1994)を見つけたのよ！！
ああ、凄い人なの。貴方の方、例の一枚の
写真(アフリカ砂漠サヘルでの飢饉を報道した
もの)、既にご覧になられましたか？ どうでし
た？ 全地球規模の経済のからくりの全貌を
知らしめ、マルクスの『資本論』の何十冊分
にも当たるほどにも衝撃でしたの。いつかゆくり
語りましょうね。

それでは、どうぞご機嫌よろしく。

千鶴子



1996年2月23日

貴明さまへ

久し振りの嬉しいおたより、有り
難う。昨年の夏の《ひと塾》の合宿以来ですが、
今回も又々盛りだくさんの貴方の＜社会学
概論年間フィードバック＞を面白く読ませてい
ただきました。卒業を間近に控えての学生時

代最後の学びの年を費やして、貴方がさまざま
な方面での人々との出会いにおいて惹起さ
れた想いのあれこれを懸命に咀嚼なさろうとさ
れておいでなのが、とても好感が持たれました。
それは何よりも、日ごろ慣習(習慣)という‘麻
酔薬’を嗅がされたままで眠っていた意識が
徐々に目覚めてゆくことの衝撃(心的痛み
mental pain)を貴方がご自分の言葉で率直
に吐露されておいでだからです。

そう言えば、先日(2/13)テレビの
放映で見掛けた「ジャック・マイヨール」という素
潜りの世界記録保持者のお話し。そのタイト
ルが＜イルカになった男＞というものでしたが、
まさにその通り素潜りのまま両手にイルカを従
える(寄り添う)恰好で水中を遊泳してました
のよ。そして、彼は既存のタブー、つまり「人間
は水中では～～だから～～は無理だ・・・」を
次々と実証的に突き破ってゆかれるの。それで
彼が言うには、「恐怖と偏見がないから、わた
しは自由なんだ・・・」って！ これは凄いです！
こうした心の状態(state of mind)こそが、
我々の心底恋い焦がれるものではないかとい
う想いが致します。それを彼は、何と、禅の悟
りとの関連で解説していたのですが！ しかし
一方で、現実には我々の中にそれを阻むもの
があり、つまり次々と幾重にもタブーを設け、
「それは～～だから無理なんだ」ということにし
て、むしろ‘不自由’の囿いの中に自らを閉じ
込めて安閑としているのではないか。そうした
「知の眠り」と言うべきか、或は「知の倒錯」と
言ってもいいかしら、それは学問(もしくは科学)
の名において、合理づけ(もしくは権威づけ)が

益々巧妙の度合を募らせてゆくような、そんな印象を私は昨今頓に抱いております。

さてここで、貴方の報告書にありました【東京シュレ】の子供たちに触れます。ああ、なるほどなと感じ入りましたのは、彼らの中に差異(違い)への免疫性(抵抗性)が極端に低くなりつつある兆候を見たことです。これはおそらく現代日本の縮図の一つでもありましょう。自分と違うひと(モノ)は不快であり、我慢ならない(つまり、不快への耐性が低い)。従って、見たくないひと(モノ)を見なくていい状況(困いの中)へと自ら引き籠る衝動が優勢的だと云えましょう。自分と同じひと同士で固まるのがいかに気楽であることか、言わばそうしたお気楽な‘居直り’のサンプルが彼らだとは言えないかしら？そして無論そうした彼らに迎合し支持してる親たち(もしくは大人、例えば【東京シュレ】の経営スタッフたち)には、それなりの理由があるわけですし、それはおそらく今日本で加速化しつつある‘階層の差別化’でありましょう。試みに彼らの親たちの出身階層、学歴、年間収入、住居の状況などを調べてみればいいです。つまり「自分とは同じではない(違う)者」を極力排斥し、この社会において「持てる階層」としての自分の‘席’を陣取るための情容赦ない差別意識が今や大手を振ってまかりとおっていると云えましょう。教育はまさにその最前線と言えるのではないかしら？

こうした社会的な「棲み分け」は不可避な社会現象であり、異論を唱えるだけでは意味がありません。むしろ私の関心事は、こ

れから果して日本の未来においてどれだけ「恐怖と偏見のない、自由なかつ豊かな人材」が輩出されるのかどうかという点であり、これは一種の賭けだという気がしております。樂觀と悲觀の両面がございます。だからこそ私は怒りを覚えるのです、【東京シュレ】の子供らのお粗末さ加減に…。因みに、どうして敬語を正しく使えたらいいって、彼らは思わないのかしら？<敬語を使えないなんて、お気の毒ねえ>と言ったら、彼らはどんな顔するかしらね。靴屋の店員にすら雇ってもらえないよ。美容院だって、そんなの使いものにならんって、お払い箱にされるのよ。それが現実。まだまだこんな自分ではどこでも通用しない、誰にも選ばれないといった嘆きからは程遠いところにいるのでしょうか。まだ何でも自分の方が選べる(親に買い与えられる)つもりなのかな(おそらく学歴もね)？それから、尊敬する人が誰もいないなんて(誰をも尊敬できない自分であることを)、自分の貧しさ加減を心底恥ずかしいと思わなくてはなりません。誰かを尊敬したい、尊敬できる人が欲しい、出会わなくては！と切実に思わないとしたら、成長も既にそこ止まりなのです。気楽さに埋没し、おとなへの侮蔑だけを支えに、どうしてこれから生きられるでしょう？！【東京シュレ】は、差異そして不平等に耐えられない脆弱な子供らを困い込んでしまっただけではないかしら。そんな危惧を抱きましたのね。

さて、話を別のことに移しましょう。ここに《浜田知明の全容》展のご案内チラシを同封しました理由は、もしも貴方が今回ご覧になれる機会を見逃されてしまったなら、

いつか必ずこの方に出会えるように、ぜひ「浜田 知明」というお名前を覚えておいてください。ねという、私からの貴方へのお勧めなのです。

本当を言えばね、唐突に聞こえるかも知れないけれども、可能ならば、貴方が今回《フィードバック》で触れておいでの元従軍慰安婦の方にもお見せしたかった。惨(むご)いこととは思いますが…。私は、展示会場を回りながら、凍りついたような涙が一粒一粒と胸の中に重く滴(したた)り落ちるような、そんな辛い気分で圧倒されていたのです。しかし間もなく、それも徐々に熱い感動へと変わってゆき、いつしか微笑すら浮かべていたのです。ここにかつて虫けら同然の扱いを受けていた一兵卒がいて、その凄惨でもありかつ醜悪でもある個人的体験(癒しがたい傷痕)が、呪われた時間の経過の中で、徐々に骨太の社会批判へと、そして風刺画として結実されてゆく様を見ることは、「浜田 知明」という方の精神の強靱さに驚嘆するとともに、まさに芸術の力の証(あか)しを見せつけられたような、そんな小気味よさに酔いしれるような感動を覚えたのです。ここに一枚の衝撃的な、『初年兵哀歌・風景』という題名の銅版画があります。そこには股を広げ、剥き出しのままの女の裸体(孕んでいるかのような大きな腹)がごろんと大地に放り出されており、臍には棒切れが1本突き刺さられています。そして、遙か遠景には行軍してゆく兵士の影が点々と…。確かにそこには被害者(従軍慰安婦人を含めて)と加害者(日本軍兵士)とが交叉した惨くも不幸な一点が赤裸々に証言されてございます。戦争という愚かしさの中では、加害者である者も同時に

被害者であるといった言い訳は安易過ぎるかも知れません。それでも尚「元従軍慰安婦問題」は、犯された側のみならず犯した側からの視点も必要ではなからうかという気がするのです。それら双方に何かの救済が問われるとすれば、一人一人が我身に起きたことが一体何であったのかを問う(知る)真の勇気からしか生じないということ。そうした不条理な個人的体験が相対的に位置付けられるためには正しい歴史観が必要不可欠だということ。それを私は《浜田 知明の全容》展から教えられたような想いがしております。元従軍慰安婦たちの矛先は目下日本政府の謝罪へと集中的に向けられているようですが、それはちょっと片手落ちとは言えないかしらという気がしております。むしろ彼女たちは自国の政府から積極的に日本軍へと差し出された(売られた)‘人身御供’であったのではなからうかという疑惑が、曖昧ながらも私の直感としてどうしても浮かんでまいります。在日韓国人問題も同様に、私のお粗末な歴史観では今は何とも太刀打ちできない恨みがございます。誠に知れば知るほどに、自分がいかに無知で、従って恐怖と偏見に凝り固まっているかということが哀しくも露呈してゆくようであります。ご一緒にお勉強してまいりましょう。

さらに精神分析家としてここで敢えて何ごとかを付け加えるとすれば、『戦争神経症(war neurosis)』の研究が西欧諸国においては精神科医療なり精神分析の発展に大いに寄与したという歴史がありますのに、日本においてはその存在すら黙殺されてきたと

いう事実です。人格(人権)の軽視という点で、それは日本人の人間観(人間把握)において致命的な欠陥を晒け出していると言わざるを得ません。浜田知明氏は「戦争神経症」の希有な生存者 survivor という意味で注目されなくてはならないでしょう。踏みにじられた己の人格の尊厳を取り戻すことの苦闘の歴史、それが彼の芸術なのです。精神分析家としての経験は、人は、自分の身に起きたさまざまな事柄を、あれは一体何であったのかと、その意味を巡って、一生涯を掛けて問い続けるものらしいということを私に教えてください。そして、そうであってこそ出会えるものがまたあるのだということをも…。そこに、辛くも生きることの希望を繋げてゆきたいと想うわけです。

さて、フランツ・カフカにこんな言葉があるというのを最近知りまして、痛く感銘を受けましたのね。今の貴方にふさわしいように思われましたので、ここにお届け致しますよう。

「もし現在読んでいる本が、脳天にふりおとされた一撃のように、われわれをめざめさせないならば、どうして読む必要があろう。いかなる書物がなくとも、われわれは幸福であろう。もし必要とあれば、読者を幸せにする書物くらいはわれわれにも書けるであろう。だがしかし、われわれが真に必要とするのは 非運の如くおそいばかり、我身よりもなお愛する者の死の如く、自殺の如く、われわれを限りなく苦悩させる書物である。書物とはわわれの内部に凍れる海を打ち砕く斧でなければならぬ。」

—フランツ・カフカ—

(補足しますと、この場合、書物に限らず、それは一枚の絵でも、一枚の写真でもよろしいでしょう。)

それから、最後に一言。貴方がこれから社会でご自分の居場所探して難儀されることについてですが。「いつどこに居て、何になっても、何かは学べる！」そんな風に貴方が今感じておいでのような姿勢をこれからも持ち続けられるとすれば、決して不安がることなぞありません。大丈夫ですよ。どうぞお励みくださるよう。ではご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1996年6月26日

郁恵さまへ

此の度は、お陰さまで本当に「持つべきものは良き友だ」ということを誠に嬉しく実感致しました。貴女からお電話で【東京都近代美術館】での『徳岡神泉展』のご案内をいただきまして、早速に出掛けてまいりました。

実に実に、「ここに日本美術は極まれり」といった感慨でした。これを越えることは今後誰にも不可能事ではなからうかと想われて、ウーム、参ったあ…って、心底思われました。門外漢である私ですらそんな焦躁を覚えたのですから、おそらく美術に携わる方々にしてみれば、これからどんな‘未来’があるのか(一体どんな絵を描けばいいやら…)と、いかばかりか頭を抱える心境であらせられるであろうかと察せられます。芸術・学術いずれの領

域にしても同様なことは起こり得るわけで、つまり歴史の或る時点で頂点は極まり、後は下り坂ということがあるのですねえ。後続の人間にしてみたら、その頂点を極めた人の足跡を辿るしかない、或はその‘遺産’を食い潰すことしかないとしたら、どうも今ひとつ発奮できそうにないかしらね。自分には誰にも出来ないことをやり遂げられるといった楽観的自負が人を挑戦へと衝き動かすのでしょから。ですから、是非ともこの人に倣いたい(この人の描くような絵を描きたい)と一途に願うことには、健気(けなげ)さはあっても、そして‘誰かの子ども’でいられるといった気楽さ・安心はあっても、だからこそいつまで経っても‘子どものまま’でしかない(親なる人を越えられない)苛立ちが心をチクチク刺すことはないかしらって思ってしまうのね。いつか貴女に『徳岡神泉』を教えてくださいました画家の方にそうしたことぜひ伺いたいわね。でも貴女が私に、「よくぞここまで描いてくれたと手を合わせたいような気持ちだった」とお気持ちを吐露なすったように(その素直さがとってもいい!)、おそらくその方も貴女に負けず劣らず謙虚なる方でいらっしゃるご様子ですから、お答えは既に十分判る気がするのね。目指すべき方向を、間違いない道を指し示されたことに感謝して、自分も同じく自分の生涯を掛けてそれに向けて精進しつつ歩いてゆくしかないって、きつとおっしゃることでしょう。

さて、「ここに日本美術は極まり」と申しましたけれども、『日本美術(日本画)』とは何かを改めて考えてみたいわけなの。それは、欧米で日本画の展示会が開催され

ますと必ず問われる質問だということはお存じでしょう。そうした場合日本人のどなたも(日本画壇の大御所なるご仁やら美術館の学芸員やら)まともな返答ができないでおいでなのはまったく腑甲斐ない限りと思っておりましたけれども。その一つの解答が此の度『徳岡神泉展』において垣間見られたような気がふとしましたのね。これは今の私が実は追及している課題とも関連しておりますものですから、まだ十分に咀嚼し切れてませんけれども、敢えて粗略ながら申し上げますとね、それは禪で言うところの「禪定」に気脈を通じる世界の顕現化ということになります。「徳岡神泉の世界」は‘禪定の美学’と言えるのではなかろうかというのが私の直観的理解でして。それって、満更的(まど)外れでもなさそうにして、実に面白いのよ、図録の最後の【主なる参考文献】をご覧になってみてね。山口玄珠という方(美術評論家?)が、『禅機を孕む鯉—徳岡神泉の近業』という一文を綴っておられるのが見付かりますのよ。実は私も会場でその『鯉』と向かい合ったときにまさにそれがあったの。自分という輪郭がフウツと溶けて、悠々と水面を浮き沈みする鯉そのものになったような奇妙な眩暈(めまい)に一瞬捉えられたの。それはことさら鯉じゃなくても、燕でも筍でも池でも赤松でも富士でも云えることでしたけれどもね、でもあの沼の2匹の鯉には心底参りました。まさしく忘我の一瞬でしたの。

そこでね、ここで話しは飛びますが、つい先日のTV番組・海外ドキュメンタリー【**神話の力**】をご覧になったかしら。そこで神話学

者のジョセフ・キャンベルが《聖なる地》について語っておられるの。そこでは自分の一切を忘れる、そうした一日のうちのひとときが人間にはなければならない。つまり自分がどこにいるのか、何をしようとしていたのかが分からなくなる。しかしそこでは何かが起こるのであり、そしてそれは自分は一体何者になり得るかを識る場でもあると…。この逆説(「死と再生」のテーマ)が凄い!と想ったのね。このキャンベル言うところの《聖なる地》(彼はそれを至福とも名付けているんだけど)、そして禅で言うところの「禅定」の境地、それが「徳岡神泉」の作品の一つひとつに顕現しているということ。これほど日本画(或は日本文化)の底力を思い知らされ、かつ圧倒されたことはありません。何ということでしょう。信じていいものがここにある、誇っていいものがここにある!かくして貴女からいただいた‘興奮’が私の中で更に増幅して、興奮の渦が静かにうねってゆくのが分かります。

あのね、今朝座禅中にふいと変てこなことが起きたの。自分がまさに『鯉』の絵の真っ只中に座していて、まあ何と例の2匹の鯉が私の周りを悠々と泳ぎ回っているんですね。水面にゆるやかな紋様を残しつつ…。楽しい‘妄想’ってとこですかしらね。あれあれ、嵌まったかな…って一瞬可笑しかったですよ。7月から【朝日カルチャー】で「良寛『法華讃』を読む」を受講するんですけど、それもまあ、おそらく究極には、この遊戯三昧の感覚に戻ってゆくことなんだろうって想うの。今から良寛さんにお近付きになるのがすっごく楽しみ。そんなこんなで貴女からすごい‘ご縁’をいただいたわけ

でして、感謝してますのよ。

最後に、貴女が生粋の仏教徒だということを伺いまして、えっと意外でしたけれども。いつも貴女からはあちら海外でのお暮らしのことなどお聞かせいただくことが多いものですから、油彩をなさっておいでですすね。一見‘バタ臭い’印象があったのは確かでしたけれども。でも貴方は、案外と田んぼに咲く赤いレンゲの花が似合っておいでなのではと、ふと後で思い直しましたのよ。

それで、最近の私のもう一つの‘興奮’、『新美南吉詩集』(岩崎書店)から、彼の詩【天国】と【神】の2篇、貴女にお礼の意味でおすそ分けにお届け致します。

いずれまた、この梅雨空が晴れました頃にご連絡致しましょうね。

どうぞご機嫌よろしく。 千鶴子



1996年12月25日

Prof. 清 真人さま

ご著書『<受難した子供>の眼差しとサルトル』(お茶の水書房)を嬉しく頂戴いたしました。おめでとう。すごい快挙ですね。ますます新たな視座の発掘に精出されておいでのご様子、ほんとに良かったですこと!

現代の精神分析の一見華々しい装いの中に衰微(弱体化)を私が見るのは、精神における‘痛みpsychical-pain’の疎外

化現象です。ヘーゲル以来の理性主義(理性は痛みを痕跡を残さないという)を私は憂っています。それは理性という名を借りた‘暴力’そのものだからです。

それでというのもなんですけれども、さてきて、私は今「アウグスティヌス」にとっつかまっております。精神の内面性、その成熟と拡がりにおいて、もしかしてそこからサルトルへと改めてつなげて見るのもおもしろいかしらね。「自分が自分に何をしたのか!？」を自らに問う、そんな精神の強靭さが求められておりますようです。共に励んでまいりましょう。 千鶴子

◎追伸：改めて、貴方は間違いなしに「彰子お母さま」の息子であることをご立派に証なさっておいでと感銘深いものがございます。貴方の表現者としての飽くなき果敢な挑戦って、絶対に「彰子お母さま」譲りよね。青春時代に巡り合われた童話作家「新美南吉」という‘心の遺伝子’を胸の内にしっかりと刻まれておいでで、童話や絵画やらと溢れんばかりの才能をお持ちで、「彰子お母さま」はほんとに素敵なんですもの。私はもう大好きです!! 都会的センスに身を包まれ優雅な佇まいでいらして、その文化的教養やら美意識やら。。もしもあの方が私の母親だったら、私はどんな私になっていたやらと、ふとちょっと‘無いものねだり’をしてみたのでしたの。それを私の古くからの友人に何気なく打ち明けたら、珍しく叱られちゃいましたの。<チズのお母さんがそれを聞いたら傷つくよ>って! 確かに不謹慎かもね。でも、表現することに臆病な私などにとって、

やはり貴方の彰子お母さまの創造(自己表現)への飽くなきご奮闘には圧倒的に魅せられる。むしろ叱咤される思いです。<怖がらずに、大いに恥をかきなさい! >って言われてるみたいで。。それでいつかいつか私も。。って心の中で呟いておりますのよ。眞人さんに負けられませんわね。



1997年12月23日

木村 治美さま

常日頃ご無沙汰いたして失礼しております。御母上様のご逝去のお知らせいただきまして、心よりお悔やみ申し上げます。さぞかしご苦勞なされましたことでしょう。どうぞくれぐれもご自分を労(ねぎら)われてくださいますように。

私自身も追い追いと親を看取る覚悟をしなくてはならない年齢を迎えていることを痛感しております。51歳にして今まだこうして両親と共に生きていられることが許されていることを有り難いと感謝しているのです。昨今の状況ではどうも、誰かの子どもでいられること、そして誰かの親でいられることの有り難みが希薄になってきてますかしら。概して生きることに驚きがそして感動も色褪せてきているのでしよう。最近私しみじみ思いましたのに、人の値打ちというものはほとんど分からない、自分の値打ちすらも、50年余付き合ってきたのに、それでも分からないということ。時折己れを省みて不安と懐疑におののきます。もしも自分に幾ばかりかの値打ちがあるとしても、それが自然に

啓(ひら)かれゆくことを迷わずに待つためにどれほどの堪忍が要るものか…。 そうだとしたら、どこかで分かったつもりの頭の片隅で‘余白(未知なるもの)’に己れが凝視されていることを絶えず自覚しておきたいものと思うのです。それは親との関係性においても言えましょうから、時間の許す限り共に生きて「親なるもの」の値打ちを日々新たに知らしめられることをこれからも大いに喜びとしたいものと、切に願っております。

つい先日、【渋谷区立松濤美術館】で開催中の《木喰の微笑仏展》に出掛けてまいりましたが、木彫仏もさることながら、和歌が素晴らしかったのです。求道心の苛烈なる気迫の中にほのぼのとした洒脱・温もりがありますの。一例を挙げますに、「**みな人の心をまるくまん丸に どころかしこも まるくまん丸**」。そこには闇の帳(とばり)を鋭く突き抜けた光溢れる心の境地が窺われ、これこそ日本人固有の感性の煌(きら)めきかと痛く感じ入ったようなことでした。

真理とは、おそらく悟ればこれほどに単純明快なることでしかないのでしょうかしら。こうして私も、どうやらようやくそろそろ日本への回帰の時期を迎えておりますようです。

それでは、どうぞご機嫌よろしくお過ごしくださいますように。 今後ともどうぞよろしく
お願い申し上げます。 かしこ

山上 千鶴子



1999年2月10日

Prof. W.S.先生

ご無沙汰致しております。お変わりございませんか？ 貴方の方にご案内をしたものかどうかと迷っておりますうちに、連絡をしそびれてしまいました。実は、先日【青山学院大学】の『パンセ会』の企画で、普段はキリスト教普及の一環としての読書会なんだそうですが、此の度「土居健郎」先生をお招きして[聖書と甘え]という特別講演会がございましたの。『朝日新聞』に掲載されてあった記事を見て、今のうちに一度彼に会っておかなくてはという気持ちに突き動かされ、珍しくも【青山学院大学】の正門をくぐりましたわけです。

小さなお教室にこじんまりと集まった聴衆を前にお姿を現されました。ご病気をなさった由ですが、かなり回復なされておいでの様子で、いくらかお痩せで、意外にすっきりした感じ。土居先生、まだまだ覇気は失われていないといった印象で、悪くはありませんでしたよ。

彼の話しを傾聴しながら、翻ってあれやこれやと私自身を振り返って見たわけです。異国での体験が、彼に比較して私の方が遥かに(心的)外傷が深いんだなあ、改めて気づかされたり…。 今なお私の中でまだまだ引きずっている、その縫れなり振れの深刻な度合が改めて浮き彫りにされたようで…。 そしていろんな意味で、彼との違いが見えたわけです。彼は自足している。もう自分と折り合いが付いたといった印象でした。もうあれでいいわけなのよね。カソリック教徒であることがやはりとことん‘体制

順応型’なのかなって思わなくもなくて…。とてもそれ以上突っ込んで聞いてみる気も失せてしまったけど。でも私はまだまだとても自足とは程遠い心境で。あれやこれやとごっそり抱えきれないほど抱えて焦ってる。どうにかようやく折り返し地点にあるみたいだけど。彼に‘模範回答’を迫るつもりもなかったけど、改めて私の中で自問自答を続けてゆくしかならうとの思いを募らせ、やはり孤りぼっちの感は否めない。貴方もいつか彼にお会いになられるといいわね。人は老いて、自分を甘やかす、醜く萎れる。まだ彼はそうなってはいないみたいだから…。貴方が感じるという物足りなさを、私も彼に覚えた。でもそれも案外ほっとするような、悪くない印象だった。＜神様のこと、そう分からなくていい…。信仰とは、子どものようになることだから…。＞って。それから聴衆からの質問に答えて、＜貴方が頼りにしている人間関係を大事にすること。それがいい甘えなら、バンザイだし。もしも悪い甘えなら、逃げなくちゃあね…。＞って。「縁なき衆生」ってのもあるって。決して辛辣でもなく淡々と…。＜存在(今在ること)の不思議を感じられたらいい…。＞と、最後に彼がおっしゃったわよ。これはいい！

ところで、話はまるで別のことに変わりますけど。実のところ、なんだか「土居健郎」から‘肩透かし’食らったみたいで、その埋めきれない空虚な心の隙間にちょっと慰めが欲しくてということだからと思うんですけど…。「まど・みちお」という詩人はご存じなかったかしら？ここに彼の詩篇＜ものたちと＞を貴方にお届け致します。その理由とは、こういうわけなのよ。

私の『語り塾』でのお友だち、越谷にいるカズコさん、貴方にお話したことあったっけ？眼がご不自由(中途失明者)でいらして、でもとっても根性ありの朗らかさんなの。それが、つい先日「某少年院」で語りの慰問をしたんですのよ。それは、沼田曜一先生が行く予定のところ都合が付かなくなり、急遽代役ということで、彼女ともう一人よく彼女の介助役なさるチエコさんも一緒に語りを、そしてもう一人笛をなさる方も一緒にあったとか。実はその話を最初に彼女から聞いたとき、そんなの酷だよと一瞬思ったの。彼女たち、近頃では確かに慰問慣れはしてきてはいるんだけど。老人施設やら小学校とか。けども、「少年院」の7百名の男の子ら(年齢は16歳から23歳未満迄)を前に民話の語りというのがねえ。もう絶句した！

カズコさんは先日、【わたぼうし語り部コンクール】という障害者のための語りコンクール(於：銀座セゾン劇場)の全国大会最終審査でみごと準グランプリに輝き、私もチエコさんと一緒に舞台下から彼女に花束贈呈したりしてね。ヤッター！とご主人と握手したりとか。まあそんな経緯もありなもんだから、舞台度胸はあるとしても、彼女は本当のところ芯はとっても繊細な人なもので…。チエコさんだって、まっとうな普通の人なわけで。惨いと思ったけど、止めろとは言えないし。沼田先生に恨み言を言うこともかなわないし…。

そしたらしばらくして、カズコさんから訪問前日に電話があって、語りの後に、障害者として一言受刑者の皆に話しをしてほしいかと先方から言われたんだけど、何を話したらいいかと思って、と私に相談したいということ

なの。どうしようねえ・・・と、一緒に悩みました。本当はね、「八木重吉」の「ぼくぼくまりをついていたら、にがいにがいまままでのことが、ぼくぼくむすびめがほぐされて、花が咲いたようにみえてくる」という詩が朗読できたらいいのだけど、でもやはりむしろ貴女自身の言葉で語る方がいいわねということになり、そこで私が彼女に言ったの。彼らはおそらく生まれ落ちてから、「頼むわね、お願いね」って言われて育ってないんじゃないかしらということ。もう我々ぐらいの年齢になると、次の若い世代の人たちにこれからを担ってもらうしかない。だからもう、「お願いね、頼みます、よろしくね」って言って言い過ぎることないと思うわけなのよって。それから他にもあれこれおしゃべり。貴方ご存じないかしら？例の両腕両脚のない若い男性が書いた『五体不満足』という著書。その話しをしたの。実際私、その乙武洋匡さんが障害者用の乗合バスに乗っていたのを目撃したの。彼はそんな風にあちこち街に出掛けては「バリアーbarrier崩し」をやってる。凄い勇気よね。そんなこんなの話しやら・・・。

そして翌々日、改めて彼女から電話があり、行ってきたと報告。それがね、氷の側に近付くとヒヤッとするような冷氣、冷たい冷たい感じだったって。背筋をピンとまっすぐに延ばしたままで、微動だにせず、笑いもせず・・・。あ～あ、やっぱりねえ。最後に彼女が話しをしたわけだけど。彼女が言うには、内心どこか腹が立ってきたみたいなのね。あんたら、若いものが、こんな檻みたいなのところにいてどうするのよって。それで怖いも忘れて、最近眼の病院に入院して（白内障の手術）、障害を抱えるい

ろんな人たちを見た話とか、それから腕も脚もなくとも一生懸命に生きている人がいるとかの話しやらを伝えて、最後に「頼みますね」という風に話しを締め括ったって。そしたら、確かに民話の語りしたとき以上に大きな拍手が湧き起こったって言うのよ。教務官らにしてみれば、甘っちょろいお婆さんのたわごとにも聞こえたかも知れないけど、と彼女言ったけど。＜それでいいのよ、良かった、良かった＞って、私言ったのね。＜でも終わって心の中にまだそのヒヤーツが残っていてね・・・＞と、彼女が辛そうに言うので、この「まど・みちお」の【ものたちと】の詩篇を彼女に読んであげたわけでしたの。「.....たえ すべてのひとから みはなされた ひとがいても そのひとに ころやさしい ぬのきれが一まい よりそっていないとはしんじがたい」この最後のフレーズの「心やさしい布切れ一枚」に貴女がなったということだと思わよって、彼女を慰めたわけでしたの。

ところがね、実際のところを後からチエコさんから伺うと、本当にカズコさんすばらしかったんですって。隣の席の教務官も大きく頷ぎいていらしたって。彼女がカズコさんにすばらしかったよって感激して言ったら、山上さんに言ってもらったのよと言ったとか。私が貴女もお疲れでしたわねとチエコさんをねぎらうと、やはり緊張してたのか、後で胃がおかしくなったわと笑ってらして、語りは眼鏡を外してやったわよと言うもんで、もう大笑い。＜もう本当にえらかった、えらかったわ＞と、私褒めてあげたわけ。頑張ってるでしょ。ちょっといいお話でしょ！？

では、またご機嫌よう。 千鶴子

.....



1999年3月3日

山谷 哲夫さま

先日はドキュメンタリー・「ファザーレス／父なき時代」の試写会のお招きをいただきまして、どうも有り難う！ 貴方がさまざまな苦難をくぐり抜けて、とにもかくにも生き延びているということの証をこのようなかたちで見せていただきましたこと、心から嬉しく思います。そもそも『日本映画学校』での卒業制作作品であったものを劇場公開版として完成させたと伺いましたが、貴方の指導下にあったお若い方々の撮影現場でのひたむきさが伝わってまいりましたし、貴方がどれほど辛酸を舐められたものやらと、そのご奮闘のほども大いに僥ばれました。ご立派です！！

さて、あの後衝撃の疼きの余韻を胸の内に抱えながら、物語の筋を改めて吟味しまして、あれやこれやと思ひ浮かんだものがございます。貴方へのこうした応答が幾らかでも貴方との分かち合いになればいいと思ひまして、臆せず気儘に書き綴ってお届け致します。

まず最初に、ドキュメンタリー「ファザーレス／父なき時代」がさまざまに、海外でも反響を得ている理由なんですけれど。そこにおそらく誰も心の内奥に抱え持つ何らかの‘衝撃’に触れるものが潜在しているからだと思われる。とりわけて「母子相姦」のテーマが挙げられましょう。女として生きてきた私自身にとって、そして子供を持つことのなかった私に

とって、これ迄迂闊にもまるで想像し難かった或る事柄が今や強烈に問われざるを得ないことになった。つまり男の子にとって母親の‘性’はどのように体験されているのかということ。それを今回改めて問い直してみたわけです。「何でカーチャンと(SEX)やっちゃいかんのか？」といったつぶやきが、執拗に雅也という男の子の胸の内から繰り返し漏れ聞こえなかったかしら？ 魅了して尽きない母親の身体、それは誘惑して止まない肉の渦でもあり、それに引きずり込まれるような眩暈に悩まされていた彼がいた。逃げることもかなわず、抗いながらも、絶えずそこへと舞い戻るしかない「反復強迫」。そうした罠に嵌まっている。(これは、クライン精神分析理論で云うところの「自慰空想」になるのですけど。)そうして徐々に身体的な自他の境目が崩れ、溶け出すのです。そして自己の崩壊感…。彼の存在感の薄さそして輪郭の乏しさは、内実の空虚でもあるわけで…。ナイフで己のからだに切り傷を付ける彼の自傷行為とは、「痛みを感じることで気持ち楽になる」と彼自身が語っているように案外自らのBODY-BOUNDARYの確認でもあったろうと思われる。つまりBODY-SELFの復権の希求とも言える。つまり「自分は自分なんだ」ということをまずは身体レベルで確認することが急務であったわけ。そして彼の無意識が求めたものが「父親探し」であったことは注目されていい。おそらくファザーレスとは、即ちboundary-lessを意味し、その欠如が、つまりは境目の奪還がめざされたのだと思われる。実父との殴る・殴られるという関係を結んだ瞬間に、その境目boundaryが彼の中に心理的に取り込まれたintrojection

ということにおそくなりましょう。そのすぐ後の父親の、＜母親に迷惑を掛けるなよ＞という厳しい諭しの言葉とともに…。父親は母親の前に厳然と立ち塞がる障壁となった。そして彼は「近親相姦」の罟からようやくにして逃れられる術を得たのだという気がする。こうしてついに彼は母親のおっぱいにすがる「小さな男子」から「おとなの男」になるべく、一つの契機を得たことにならないかしら？

それにしてもいかにも男気のありそうなこの実父が何故母親を捨てたのか、なぜ彼女を選ばなかったのかということは興味あるわね。それは雅也の実兄が自衛隊に入っていることとも関連しているように思う。つまり彼ら二人の男たちは、とにもかくにもこの母親の抗しがたい魅惑的な‘肉の渦’から逃れることに躍起になり、ついには成功したわけで、それもかなりの代償を払ってね。そこにはよっぽど強固な barrierなりboundary が必要だったと思われる。だから結果的に、過剰なほどの男性性の追究といった具合にならざるを得なかったろうと推察される。そして父親と実兄の方は何とかそれをものにしたけれども、雅也はそれを見付けあぐねていた。見知らぬ年配の男もとの同性愛的性交渉もおそらくはそうした男性性の取り入れの意図があり、実父及び実兄に倣う意味があったろうと思われるわけです。しかしそれは、母親の‘肉の渦’に引き込まれたまま、恐怖と甘美なる蜜の味に酔いしれる彼にとって抵抗し得る防壁とはならなかったわけで…。むしろ身体的な侵犯を許すことは超自我的な懲罰の意味となったろうと思われる。

勿論それで慰められるわけでもなく、いっそう崩壊感を募らせていくわけで、だから彼が自殺へと追い込まれていた、その当時の心境には極めて現実的な切迫感がありましたでしょう。

そうした雅也のぎりぎりの葛藤に観客としての私たちが感情移入する上で、映像を通しての母親の容姿は、実際なるほどと説得力があったわね。この母親の色香はただごとではないものを匂わせる。それは貴方が彼女の氏素性に触れられてましたが、それでなるほどとも思ったけど。もっと何かがそれ以上にあるそう。封印されている何かが…。奇妙な感覚に襲われたの。彼女のからだはまるで穴だらけ(隙だらけ)だって。そんなイメージが一瞬脳裏を過ぎったわけ。養父がふと漏らしたわね。＜もしも庇ってやらなきゃ、あいつは死ぬぞ。あいつはいつ死ぬか分からない女だ＞って。あの言葉は謎めいている。何かとんでもないものを匂わせる。雅也との話しの中で、彼女が同性愛とか被差別部落などへの世間的な偏見・タブーからいかに解放されているかが垣間見られてすごいと思ったんだけどね。世間体などクソくらえ！というのがいいわね。でもふと思ったの。それもこれもすべて彼女の心的外傷/トラウマの記憶があって、虐げられた者特有の理解と共感なのではなかったかと。またそれだけではない別の何かも臭う。雅也の同性愛者としての悩みを打ち明けた際、彼女は笑い飛ばし、彼を慰め、尚更愛おしいと言うのだけど、その底無しの包容力にはまったく感服してしまっただけ。しかしながら、彼女はそれが本当に何であるのかの意味を問うことを知らない、

知らないままに受け入れることが出来ちゃうわけなのね。この危うさ、そしてデタラメさ。彼に同性の恋人がいるというのとはわけが違うのよ。男娼なわけで、その屈辱と悲哀は軽く否認されてしまっている。ここに私は違和感を覚える。それじゃあ本当に理解されたことにはならないのになあって…。そして更に、その軽さの中に、むしろ奇妙なはしゃぎ(興奮)を感じ取る。それでふと思ったの。彼女は、彼に女ができないことをむしろ喜んではいなかったかどうかって。息子を自分以外の女を抱けない男にしまったことに微かな勝利感を一瞬にしても味わったということはないかどうかって。(雅也の伯母なる人への敵対心の凄まじさに関連づけると、より鮮明かも…。) 実は、かなり以前だけど私のここに通っていた若い男性の分析患者が言ったの。<母親にとって自分が誰か女性と暮らしたりするぐらいなら、死んでくれた方がいいと思っているに違いない>って…。そう、確かに彼は、彼がいみじくも言った通り、親にとっての‘人身御供’となり、‘犠牲の子羊’そのままの人生を彼自ら選ぶとしていたわけで…。雅也にもその傾向がチラッと垣間見られた。おそらくある時点で養父という存在にその役割を奪われなかったならば、言い換えれば肩代わりをしてもらっていなかったならば、母子相姦の事態はもっと深刻にエスカレートしていたことでしょう。そこにはまるで別の人生が、おそらくは底無しの深い闇が彼を待っていたかしらね。

貴方は<女は怖い>とおっしゃったけど、この母親なる女をじっと凝視するうちに、確かにねえ、「私がいなければ生きられない

ダメな男」を無性に欲しがっているのが分かる。それと矛盾しているけれども同時に、「私がいなくても生きられる強い男」にも憧れてるわけで。二つのタイプの男たち。それは養父と雅也が前者、そして実父と実兄が後者、それぞれ該当しないかしら?! 彼女、欲張りだよなえ。そしてとっても正直だ。そして最後収まるところに収まっている。つまり、男がとことんバカになって惚れてくれなきゃ、女は救われないってこと。あの養父、実に良かったわよね。俺しかこの女を分かってやれないという、あの彼の気概。いいわねえ。修羅をぐり抜けた者同士だからこそその愛情。実にいい。本当に思うのよね。この年になってね、男の値打ちって、女の値打ちって何? って…。とことん分からないものなのよね。それから人の値打ちにしても、また自分の値打ちにしてもね。雅也にはそれらを模索するために、親と出会い直す必要があったんだと思う。それに付き合う私たち観客にしても、そうした彼の発見の驚きと喜びを幾らかなりとも分かち合うことができたとも言えるし。映画が成功している理由の一つでありましょう。

このドキュメンタリー映画を「近親相姦」のテーマに絞って論議する必要も敢えてないんだけど…。それは地球上において極めて今日的な深刻な課題でもあるという認識はしておきべきかとも思うの。

先日の或る民放のドキュメンタリーが興味深かったです。アメリカの或る刑務所内。トラウマ(心的外傷)を克服することが意図された心理ワークショップが紹介されていたの。参加者らは皆矯正不能な凶悪犯罪者たちなのよ。犯罪者の再犯率があまりにも高いために、業を煮やした当局がそうした心理治療 treatment

を導入したんですって。そこで彼らによって語られた事柄に心底たまげただけど、皆が皆、性的虐待 sexual abuse を経験してるわけです。問題は近親相姦。全国受刑者の網羅した統計においても何と7～8割方がそうした経験を訴えているということなの。実に信じ難い数字ですわね。

インセスト(近親相姦)・タブーは古来から人類が定めた掟。それが今世紀末、「どうして人を殺してはいけないか」と若者が問えば、それへの解答を求められた有識者がうろたえ、ああでもないこうでもない論議沸騰といった具合に、今やタブーが議論の対象になろうとしている。そしてインセストも同様。「どうしてカーチャンと寝ちゃダメなのか」、「どうして息子に抱かれちゃいけないのか」「どうして娘とやっちゃいけないのか」などなど。やっちゃいけないのは、結果を見れば誰しも先刻ご承知。心的外傷の苛酷さ、それが証人。でも、それは逃れられない袋小路。一旦迷い込むと、出口は見付からないわけなのね。おそらく世界中の人々が、その問いに答えを見付けようと右往左往してる。一旦問うことのタブーが解禁となった以上、解答はぜひでも求められねば収まらない。貴方のドキュメンタリー映画「ファザーレス/父なき時代」がおそらくそうした一つの解答であって、そのことが世界のあちこちで賞を獲得した理由であったのかも知れない。どう思われますかしら？

そしてこの貴重な問題作を携えながら、これからも尚生きてゆかねばならないわね、貴方もそして雅也くんも…。多くの人々からの眼差しを得て、その照り返しの中で、自己照射しつつ、自分を自分として位置づけてゆく作業は一応終わったかしら？これからはもう一つその向こう側に「己れ自身」が問われてゆくかしら？

新たな‘脱皮’を、ぜひ期待したいと思うの。

『日本映画学校』においては「人間研究」の授業がありと伺っております。ドキュメンタリー映画製作とは、とことん「心の真実」の軌跡を辿ること。精神分析に携わる一人として‘連帯’を秘かに期待しております。人間なるものの赤裸々な姿を抉り出すこと、そこから贖われる‘個としての実存’の蘇りを祈るばかりです。ではご機嫌よう。 千鶴子



1999年11月23日

文代さまへ

懐かしいお手紙、どうもありがとう！ ご家族の近況なり、あなたの気持ちも手取るように解るし、それに一博くんの成長ぶりも傑作よね。ああ、本当に‘生活してゆく’って、‘家族してる’って、こんなことなのよねってことがとてもよく伝わってくる。あなたとおばあちゃんとの気持ちのやり取り、それに擦れ違いも、まあ実は一博くん良く見てる。大した観察眼なことね。生きるということは断じて絵空事ではないということをしかり彼に見させておくのがむしろいいでしょう。あなたはその点、ちゃんと‘からだ張ってる’！ えらいわ！ 振り返って、ほんとに不思議の一言よね。思いがけないご縁で舞鶴から出石へと嫁がれて、よくぞ彼の地に根付かれましたわねえ。よくぞ、あっぱれ我慢しましたわよね！

そこでここに一枚の絵葉書を同封致しました。＜気に入らぬ風もあらふに柳哉＞。どう、この仙涯の画賛がいいと思わない？ 心に沁みる！ つい先日、『出光美術館』の《仙涯

展》を訪ねた折り、幾つか気に入った絵葉書を買って来て、その一つなの。今のあなたのご気分ちょうどいいと思ったの。どうかしら？ ‘弱い人’に見える人こそ、実は強いのだと思うわけ。この句を時折つづやいてみてね。気持ちが落ち着くわよ。近頃、一休禪師とか仙涯和尚とか、なにやら禪に頻りにこだわってますわけ。お近くの宗鏡寺は確か沢庵和尚ゆかりの寺でしたかしら？ あそこの石庭は風格のある、いい庭でしたね。出石は、まことに風光明媚で、懐かしい風情のある町です。仏像もあちこちにいいものがありそうね。

私、この夏には若狭、特に小浜周辺の寺なんですけど、観音さま巡りを父の運転する車で見て回ったのよ。つい先日、秋休みに帰省した際には、『滋賀県近代美術館』で＜近江路の観音さま＞という展示会が催されてまして、父親のお伴で一緒に出掛けたりでした。幾つもの木彫りの十一面観音像がすばらしく秀逸なの。堪能しましたわけ。

言うなれば、しばらく前からようやく「日本回帰」を迎えましたといった感じで、仏像に限らず、神楽などの伝統芸能とか道祖神やらの追っ掛けやら今やとても忙しいのです。先日も青梅の御嶽神社の「薪神楽」を見に、独りでわざわざ泊りがけで参りましたし。近々では、南信濃村和田に於ける諏訪神社の「湯立て神楽」を予定しております。これは2泊3日の‘体験ツアー’なのです。まあまあどうなりますことやら・・・。

つい先日は狛江市の公民館で催された《狛江舞踊を楽しむ会》の発表会に友人に誘われて出掛けました。松延博とかいう方の企画のようです。元東京教育大の体操

の教授で大変な遊びの達人なんだそうで、停年退職後に踊りやら面作りやらに興じていらっしゃるんだとか。彼手作りの面がなかなか凄みがあったり、おかしみがあったりと実に多彩で良かったの。それだけではなく踊り手の動き・仕草がそれらに息吹を与えて、まさに闇の魑魅魍魎が舞台狭しとごめくさまはまさに迫力があって感動的でしたの。舞う人の殆どはお稽古をしてますというだけの地元のアマチャアの方々でしたが、一人だけこれは凄いとされる若い男性の踊り手がいて、舞台終えた後に話しをする機会があつてなるほどと思ったことに、彼の師匠は舞踏家・故土方巽の奥さんの元藤アキコさんなんだとか。まさにホオーって感じよね。土方巽記念アスベスト館でアトリエ・ソロ公演に彼が出演するということでご案内を貰い、早速出掛けてまいりました。こうして思いがけなくも《舞踏》との久々の嬉しい再会となりました。松尾尚司という方でしたが、「空」という題で踊られました。狛江の「闇に招かれて」にも一脈通じるような、おそらくは‘再生’がテーマなのでしょう。未知なるものへの恐怖(=抵抗の壁)、それを突き抜けたところにこそ安寧がそして歓喜があるのだということを教えられたような・・・。衝撃を覚えましたの。私の方の近況はこんな具合なのですよ。

あれこれと最近頓に、「からだに嬉しいこと、心に嬉しいこと」を積極的にやろうと決めたの。「明るいのが一番！」ということらしいわね。まあ、なにごとくも《気に入らぬ風もあらふに柳哉》でまいりましょうね。ご機嫌よう。

千鶴子

.....